厄病女神寄生２

雑草生産者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
厄病女神寄生２

【Ｎコード】
Ｎ８３０４Ｉ

【作者名】
雑草生産者

【あらすじ】
「厄病女神寄生中」及び「偏屈先輩帰省中」の正統なる続編です。前シリーズを読んでいないと意味が分からないでしょう。
毎度お馴染みの偏屈先輩の元へ、再び、毎度お馴染み厄病女神がやって来ます。ほのぼの日常ラブコメ。非日常なんて存在しないのです。

厄病女神からの着信（前書き）

本作は拙作「厄病女神寄生中」「偏屈先輩帰省中」の続編です。
前シリーズを読まねばストーリーやキャラが把握できないと思われます。
以上の点、ご注意・ご理解願います。

厄病女神からの着信

諸君、御機嫌よう。久しぶりだ。ご機嫌如何だろうか？　ご機嫌な者も不機嫌な者もいるであろう。ただ、あんまり機嫌がいいときにこんな駄文を読んでは機嫌が損なわれるので避けた方が宜しい。不機嫌なときに読むと余計に機嫌が悪くなるので、これまた、回避すべきだ。この点、忠告しておく。

さて、諸君の機嫌はさて置くとして、今、俺の機嫌は最悪だ。

何故に機嫌が悪いかといえば、まず、第一に、非常に頭が痛い。頭蓋骨の内側、脳の内部から外に向かってガンガン叩かれている感覚がして、非常に糞痛い。自然としかめ面になる。まぁ、普段からしかめ面であることが多いゆえ、変わらないといえば変わらないのだがな。

それと、腹の具合が大変宜しくない。胸もムカムカしてしょうがない。腹から胸にかけてぐぐぐっと込み上げるものを気力だけで押さえつけるのもそろそろ限界に近い。ちょっとでも気を抜けば、ゲロっと出てしまうことは間違いない。

ついでに眠気も押し寄せてきており、俺の瞼はかなりの重力を感じている。今にも目を閉じてしまいそうだ。眠い。瞼が重くてしょうがない。帰る道すがら電柱の陰やらに蹲って吐いた後、そのままゲロの上で惰眠を貪ってしまおうかと何度思ったことか。さすがに思いとどまったがね。公園のベンチで休んでいたときの記憶が一時間ほどないのは気にしないこととしよう。

無事、帰宅できた折には、直ちにベッドへ突っ伏して、即就寝といきたいところだが、この腹具合で睡眠でも取ろうものならば、寝ゲロ確実だ。起きたら己のゲロに塗れているなど考えただけでも気分が悪くなる。その後、己のゲロに染まった布団を洗うときの惨めさといったら思い出すだけで欝になる。

寝るなら吐いてからにすべきである。布団に入る前に吐くことに

しようと俺は心に強く決めていた。
こんな体調でご機嫌な奴がおったら、そいつは相当奇特な思考回路をしているに違いあるまい。

そんな最悪な気分及び体調で、細かい作業をすれば、具合と機嫌は余計に悪化するというものだ。×が書かれた隙間をGだか丸だか分からないが、なんかそれっぽいペンでちまちまと塗り潰す「ベタ塗り」なる糞細かくもめんどくせー作業を延々と一時間も二時間も続けていると、気分も気持ちも益々悪くなる。
「うぐぅ……、もう吐きそぅ……」
「あ！　ちょ！　止めてよ！？　原稿に吐瀉（としゃ）するのだけは勘弁してよっ！？」
俺の呟きに背中合わせに座っていた奴が悲鳴を上げた。
「いや、無理だ。いいか？　よく聞け。夕方六時から午前三時まで飲んだり食ったり口論したり殴りあったり散々大騒ぎした挙句、五キロメートルの道程を延々一時間以上かけて歩いて帰ってきて、さぁ、便器でGOってなところで、拘束されて、ベタ塗りだのトーン貼りだのを何時間もさせられりゃあ吐きたくもなるし、我慢も限界だ」
「それをもーちょっと我慢してよー。午前中までにこれあげないと雑誌に穴が開いちゃうんだよー」
「無理を言うな。もう限界近いんだ。一回、休ませろ。そして、吐かせろ。寝かせろ。いい加減、もう我慢できんぞ。もう、こう、こ、こみ上げてきてるんだ……」
「あぁっ！　止めてよっ！　原稿汚したら、僕、殺されちゃう！」
背後で悲鳴が上がるのを聞きながら、俺はこみ上げてくるもの（それが何かなんてことを具体的に固有名詞で言わねば分からん奴はおるまい）を抑えるのに必死だった。口を両手で抑えるも、もう喉まできているものをいつまでも口の中に留めておくことは不可能だ。今にも鼻から噴出しそうだ。想像したくもない。

こーいうものを口から出す際には便所で出すことが衛生上好ましいというかマナーというか常識というか、それ以外の場所で放出することは考えたくもないことだ。しかしながら、現状では、もうそんな便所まで歩いていって悠長に吐いてるなんて暇はない。ここから一歩でも動こうものならば、即吐だ。

「ぎゃーっ！　ぎゃーっ！　本当に止めてよーっ！　こんな狭い締め切った部屋の中で吐くとか本当に止めてよーっ！」

そんな騒いでる暇があったらゴミ箱でもバケツでもビニール袋でも寄越せと怒鳴りつけたい気分になるも、怒声より出るものが先に出てしまうことは火を見るよりも明らかなので、目だけで何か容器を寄越せと合図する。口を開けば言葉より先にモノが出る。

「え？　何さ？　は？」

しかし、全く通じない。えぇいっ！　この役立たずめっ！　貴様の間抜け面に吐いてやろうかっ！？

仕方がないので、自分で何か入れ物を探す。足元のゴミ箱ーは、失敗した原稿やら紙くず、トーンの切れ端なんかで溢れかえっている。この上に吐瀉すれば確実にゴミ箱外にだだ漏れる。

他に何か入れ物はないかと部屋の中を見回すも、この部屋は漫画と小説（殆どがラノベ）とゲームとアニメＤＶＤとフィギュアとポスターでひしめき合っていて、実用的なものなど皆無に近い。俺の手近にある空き容器なんてのは空きペットボトル程度のものだった。この狭い口の中に注ぎ吐くのは至極難儀だぞ。

仕方ない。覚悟を決めようではないか。最終手段を行使するしかあるまい。非常に気持ちが悪いゆえ全く気乗りしないことではあるが緊急事態だ。致し方あるまい。

俺はこみ上げてきて喉から口の中に進出し始めている、そいつを思い切って飲み干し、喉の奥へ、腹の中に押し戻した。

「ごっくん。げぇっぷぅっ」

「うわぁっ！　飲んだっ！　キモッ！」

俺の背後で再び上がる悲鳴。誰のせいで、ごっくんした上に、げ

っぷまでしちまう羽目になってると思ってんだ。頭にきた俺は振り返って怒鳴りつける。
「やかましいっ！　仕方あるまい！　この部屋を阿鼻叫喚の地獄にしない為にはこれしかなかったのだっ！」
「息臭いよっ！」
「うるさいわっ！　黙ってろっ！　そして、もう帰らせろっ！」
「いーや！　それはダメだよ！　はい、これ、ベタやって。君、もうベタ塗るの本当に上手くなってきたよねー」
「そら、こんなにベタ塗ってりゃ嫌でも上手く線の中に入るわ。そもそも、貴様の漫画はベタが多すぎるんだ！　なんで、こんなにベタだらけなんだ！」
「だって、血が多いからねぇ」
まぁ、普通、モノクロ漫画で血はベタ塗りだわな。
「そうだ。血が多すぎるんだ。もう流血するなっ！　出血禁止だっ！」
「いや、無理。だって、僕の漫画って、残虐スプラッタダークファンタジーだし。商業の青年誌で連載できてるのが奇跡なくらいの」
「貴様なんぞ、いつか出版倫理委員会とかそんな感じの機構から怒られてしまえ。ＰＴＡに訴えられてしまえ」
「それ、ジョークにならないから、本当にやめて」
俺と背後に座っている奴は、そんな会話というか罵り合いというか、罵っているのは一方的に俺なんだが、ともかく、そんなふうにしながら、俺たちは、ひたすらに、ただ、ひたすらに、漫画の執筆作業とそのアシスタント作業を続けた。
俺の隣室に住む男、要するに、今、背中合わせに座っている奴は漫画家の端くれで、締め切り目前どころか締め切りを数回破った末に、もうこれ以上、マジで本気に伸ばせないといった日の夜、飲み会から帰ってきた俺をとっ捕まえ、アシスタント作業をしてくれと土下座で懇願してきたのが数時間前のこと。それから今まで俺は延々とトーンを貼り、ベタを塗り、線を引き……。

ふと、カーテンの隙間から白い光が差し込んできていることに気付いた。
「おい、もう朝だぞ。外が明るいぞ。何時だ？」
「さぁ？　もう何時間も時計見てないし。あと少しあと少し」
後ろの漫画家は役立たず極まりないので、渋々と自分の腕時計を見るも、腕に腕時計がない罠。何処にやった？　失くしたか？　まぁ、いい。探すのも億劫だ。どーせ安物だ。
代わりに部屋の中に時計がないかと見回すもそんな実用的なものはありそうにない。二次元キャラの美少女たちの笑顔が目に入るばかり。全く住人が役に立たんと、部屋も役に立たんものか。
仕方がないので、ポケットに入っているはずの携帯電話を探る。もし、こっちもなくなっていたら、さすがに問題だ。携帯会社に電話せんとならん。だが、携帯電話以外に電話を所持していない俺はどーやって電話すればいいものか？　大家に借りるか。
しかし、幸いにして、携帯電話は大人しく我がジーンズのポケットの中に納まっていた。カパッと開いて画面を見ると、
「おぉぅっ！？」
時間を見るよりも先に驚く。なんと着信ありが七件に、メールが十数件も入っているではないか。俺は普段からさほど携帯電話を使用する主義ではなく、うっかり不携帯してしまうことも多いような人間である。さほど頻繁に電話やメールのやりとりをする相手もいないゆえ、今までのこれほどの数の着信を見たことがなかった為、かなり、驚いた。
「しかし、何で鳴らんかったのだ？　あぁ、そうか。バスに乗ったとき、マナーにしてそのままだったっけか」
一人納得しながら携帯電話の液晶画面を睨みつける。時刻は九時少し過ぎだった。まぁ、それは、もういい。
どこのどいつだ。こんな非常識にも夜中に何度も電話やらメールやら送り付けてきやがったのは。いや、まぁ、想像はできる。残念なことに、俺の知人の中に、一人ばかりそーいうことをしそうな奴

に思い当たるのだ。
俺は携帯電話に連絡先を登録するにあたって、そやつの名前を本名ではなく、あだ名というか、俺の一方的な呼び名で登録していた。
着信の送付元を見ると、やはり、案の定、そやつの登録名だ。
「厄病女神め」
俺は忌々しい気分で呻く。
こやつがこんなにも連絡を取ってくることが吉兆なわけがない。きゃつは俺にとって、間違いなく、厄病女神であり、糞忌々しい厄介ごとを呼び寄せては、俺を不幸に陥れる悪の権化なのだ。奴と関わったせいで、俺が何度厄介な目に遭ったことか。過去、何度か死にかけたのも、奴のせいであると俺は信じている。
いやーな気分になりながらメールを確認する。古い順番に見ていくこととしよう。
「今、駅にいますー」
何処の駅だ？　日本には津々浦々何十何百という駅があるのだぞ？　具体的な駅名を記載しなければ意味があるまい。
イライラと心の中で毒づきながら、次のメールを見る。
「今、列車の中ですー」
何の列車だ？　日本には津々浦々何十何百という路線があって、何十何百という列車が以下略。
「今、お茶飲んでますー」
勝手に飲んでろ。
「駅弁売り切れでしたー」
知るか。
「今、駅弁食べてますー」
「おい！　ちょっと待てっ！　さっき、駅弁売り切れだっつってただろうがっ！？　どーいうこっちゃねんっ！？」
「君、何、騒いでるのさー。早くベタやってよー」
「うるさいっ！　黙れっ！」
後ろの奴を怒鳴りつけて静かにさせてから、俺はメールを見直す。

あとは暫くの間、列車から見える星空が綺麗だの。隣に座ってるおばあさんから蜜柑をもらっただの。前に座ってるおっさんの髪が明らかにヅラで、しかも、ズレてるだの。高校生に間違われただの。トイレがいつまで経っても空かなくて漏れそうだのと、どーでもいいメールが十件くらい続き、

「今、駅に着きましたー」

だから、何処の駅だっつーの！？

「今、歩いてますー」

「今、商店街の入口ですー」

「今、何々堂の前ですー」

「今、善太郎書店の前ですー」

と、続く。

これから見るに、今いる場所、つまりは、俺の住んでいるアパートの最寄り駅から、こちらへと徐々に徐々に近づいているようだ。

「今、木暮壮の前ですー」

木暮壮とは俺の住処である小さなアパートの名称だ。古くも新しくもなく、家賃は平均よりも控え目。ただし、駅から少し遠いのと、近所のコンビニがない。部屋数は十ほどで、殆ど俺と同じ大学の学生が住んでいる。今俺がいる部屋の主のような例外もいるが。

そして、最後のメールの文面はこうだった。

「今、先輩の部屋の前ですー」

貴様はメリーちゃんかっ！？

厄病女神からの着信（後書き）

毎度お馴染みの厄病女神シリーズの続編であります。結構以前から連載開始する開始すると言っておきながら、ズルズルと遅れてしまい申し訳ありません。

週一更新（毎週火曜日更新）を目指して連載していきたいと思います。

厄病女神の再来

携帯電話を開いて厄病女神からのメールをチェックしていると、タイミング良くというべきか悪くというべきか、八件目の電話が入った。

このまま放置してやっても、いや、着信拒否してやってもいいのだが、それでは問題の解決にはならん。問題の先送りになるだけだ。国の赤字予算編成みたいなことをしても意味があるまい。

業腹であったが、通話ボタンを押した。

「何用だ？」

「あっ！　先輩！　先輩ですかーっ！？」

電話の向こうからは間延びしてどこかぼやけたのんびり声が聞こえてくる。やはり、あの忌々しき厄病女神の声に違いなかった。

「俺の携帯に電話してきているのだから、俺が出るに決まっているではないか」

「そーなんですけどー。だってー、先輩ったら、電話してもメールしても、全然、反応返ってこないんですもーん」

どことなくぶーたれた感じの声が聞こえてくる。奴が頬をぷくーっとさせている姿が脳裏に浮かぶ。

なんだか、妙に語尾が間延びした、聞く者が聞けばイライラしてきそうな喋り方をするが、これがこいつの通常の話し方なのだ。俺は慣れた。

「マナーモードにしていて、気付かなかったのだ。それよりも、何だあのメールは？」

「何だって何ですかー？」

「色々とツッコミどころ満載だったぞ！」

「そーですかー？」

電話向こうの奴はいつもどおりの間抜け声で応じる。

「そうだとも。そもそも、ありゃ何だ？」

「ありゃ、とはー？」
「あのどんどん近づいてくるメール形式だ」
「いやー、少しずつ私が先輩へ近づいてきているってうきうきするかなーっと思いましてー。宜しくなかったですかー？」
「宜しいわけがあるまい！　メリーちゃんのつもりかっ！？　アレのメールの送信元が知らん番号とかアドレスだったらマジで怪談ものだぞっ！」
「メリーちゃんってー、どんどん近づいてくるって電話かけてくる人形でしたっけー？　あたし、メリーちゃん、今、あなたの後ろにいるよー。とか言うのー。でも、先輩って幽霊とか信じてないんじゃなかったでしたっけー？」
　信じてないんじゃなかったでしたっけーって、なんだそのヘンテコな日本語は？　国語教育の必要性をひしひしと感じながらも、今はそれは捨て置くこととする。
「勿論、信じてはおらん。メリーちゃんと言ったのは、モノの喩えだ」
　俺はそーいう非科学的なことは信じないようにしているのだ。そんな伝聞でしか聞いたことのない上に、十分な科学的論証もされていない事柄をどうして無条件に信じることができようか？　そんな不確かなものよりも俺は人類が何百年、何千年と学び考え蓄積してきた科学知識や物理法則、常識といったものの方に信を置く。
　もし、目の前で実際にそーいった現象を目にすれば考えを改めることも吝（やぶさ）かではないが、今までの二十何年の人生では生憎と目にも耳にもしたことがなかったからな。
　と、まぁ、こんなことはどーでもいい。
　それよりも他に気になることがいくつもあるのだ。俺はこーいうツッコミどころのある事柄があると気になって気になってしょうがないのだ。神経質とは、よく知人に言われることだ。
「それと、貴様は結局、駅弁を食ったのか？　売り切れてて食えなかったのか！？　どっちなんだ！？」

「あー。私が食べたいと思ってた『春爛漫、春の山菜釜飯弁当』が売り切れてたんですよー。でも、鳥釜飯弁当があったので、それを食べましたー」
「じゃあ、何々弁当がなかったとか！　代わりに何々弁当を食ったとか書けっ！　相手にゃ全然伝わらんぞっ！　そうだっ！　貴様は固有名詞を省きすぎなんだっ！　駅とか列車とか言われてもどこの列車だか分からんだろうがっ！」
　なおもツッコミどころを一つ一つ挙げていって説明を求めたいところであったが、しかし、そうしている最中に、厄病女神が怒鳴る俺を遮った。
「それより、先輩、今、何処にいるんですかー？　部屋の中がもぬけの空なんですけどー」
「人の話をぶった切るなっ！　って、貴様、今、俺の部屋にいるのかっ！？」
「はいー。だって、外にいたら寒いじゃないですかー」
　電話の向こうで奴はのんびりと答えるが、それは住居不法侵入だ。れっきとした犯罪だぞ。その自覚は、まぁ、ないんだろうな。
「鍵はどーしたっ！？」
「去年、頂いたのを持ってますからー」
　あぁ、そうだった。俺はがっくりと項垂れる。
　去年の夏頃、こやつは、いきなり、何の前触れもなく、俺の部屋にやって来て、夏休み中、寄生生活を行い、その過程において、俺の部屋の合鍵を手にしたのだった。すっかり、失念しておった。鍵を取り替えるのを忘れておったわ。
「で、何処にいるんですかー？　まさか、浮気ですか？」
「隣だ。隣」
「隣？」
　電話の向こうでがたがたと何やら音がして、ドアを開く音、とことこと歩く靴音なんかが微かに聞こえてくる。
　そして、こっちの部屋のドアが開く。

そこに立っていたのは、誰あろう彼あろう。ずばりというか、やはりというか、厄病女神であった。
小柄で軽く、それに見合ったミニサイズの頭部は掴んで投げられそうな感じで、たまに鷲掴みたくなる衝動に駆られる。口と鼻は小さめで、瞳は少し茶色の垂れ目。髪は短め。ほっぺがやらとぷにぷにして気持ちよく、これが、また、何かの中毒成分を含んでいるのはないかと思えるほど癖になるのだ。
年は俺よりも二つ下で、俺と同じ高校に通っていて、そこで、とある活動を行う組織でつるんでいた仲である。つまり、彼女は俺の後輩に当たる。
こいつこそが、厄病女神こと、絹坂（きぬさか）である。下の名前は何だったっけかな。確か、コロンボとかそんな感じだ。
「あ、先輩だーっ！　せーんぱーいっ！」
そいつは俺を見つけると、猪の如く、こちらへ突撃してきた。そこら中の、床に転がっているゴミだのガラクタだのを蹴飛ばしながら、飛び込むように抱きついてきた。
「ぅげふっ！？」
厄病女神の小さい頭がちょうど俺の腹部、しかも、鳩尾に突き刺さるように衝突し、俺は危うくそいつの頭の上に吐瀉しかけた。また、口の中までこみ上げたものを再び飲み干す。
「ごっくん。げっふーっ」
「んー？　先輩、どーしましたー？」
「いきなり、突っ込んでくるなっ！　貴様は地獄を見たいのかっ！？」
「何言ってるんですかー？　て、先輩、息臭っ！」
「うるさいっ！　黙れっ！」
俺に一喝されても、絹坂は全く気にしない。高校時代に何度も俺に怒鳴られたせいで、すっかり耐性ができてしまったらしい。俺はどーにも短気な性質で、すぐに怒鳴るくせがあるのだ。うっかり手が出ることもしょっちゅうではあるが、まぁ、怒らせることをする

方が悪いのだ。うむ。
「ところで、先輩は何してるんですかー？」
俺の膝の上に座り込んで、抱き付いたままの絹坂が小首傾げて尋ねる。
「見て分からんか？」
絹坂は俺の前にあるテーブルに載っている漫画の原稿やペン、カッター、トーンを見つめてから答える。
「なんか、漫画家のアシスタントさんみたいんですねー」
「それだ」
「あ、見たみんまそーなんですかー」
絹坂はぼんやりと呟くと、興味深そうに漫画の原稿やらを眺めたり、トーンを手にとってひらひらさせたり、ペンで紙切れに落書きをしたりし始めた。
「おい、邪魔だ。作業ができんではないか。とりあえず、膝の上から退け」
「えー」
絹坂は不満そうだ。
「そもそもー、何で、先輩がアシスタントなんてしてるんですかー？」
「それには止むに止まれぬ事情があるんだよー」
彼女の疑問に俺の背後で暫く静かにしていた奴が呻き声を上げ始めた。
細目で小柄で不健康そうな青白い肌の男。年は俺と同じ。漫画家の端くれ。名前は柚子川誠という。
「なんだ。貴様、さっさと漫画を描かねばならんのじゃないのか？」
「僕の方はもう粗方終わりだよー。あと背景入れないといけないけどー。で、君も早くやってくれなーい？」
「馬鹿を言え。貴様の仕事が粗方終わったのならば、俺の手伝いはもう必要あるまい。俺はもう吐いて寝る」
「吐いて寝るなんて言う人、初めて見ましたよー」

膝の上で絹坂が呆れ顔で呟いたので、そいつの頭を拳でぐりぐりしておく。
「ぎーぃーゃー」
「とにかく、俺はもう帰るぞ。もう十分に貢献してやったであろう」
絹坂の悲鳴を聞きながら、俺は後ろの奴に言い捨て、ついでに膝の上に乗っかっているものをその辺に打ち捨てて席を立つ。暫くぶりに体を動かすと吐くかもしれないので、ゆっくりと慎重に立ち上がった。なんとかまだ耐えられるようだ。
「えぇー。ひどーい。どーせなら、最後まで手伝ってよー！」
「では、こいつを置いていく。こき使うがいい」
「え。先輩、何言ってるんですかー？　私、今日、こっち来たばっかなんですよー。荷物の整理とか手続きとか色々あるし、先輩と積もる話もあるしー」
「んなもん、知るか」
「ひどい！」
絹坂はぷんすかと怒って、部屋から出る俺を追おうとしたが、
「絹ちゃーん、手伝ってー」
柚子に捕まっていた。
二人は、絹坂が夏休み中、俺の部屋に寄生していたときに知り合っているのだ。
「離して下さいーっ！　私は先輩とー！」
「僕のを手伝ってからでもいいじゃーん。頼むからー頼むからー。後生だからー」
ばたばたがたがた掴み合いをやっている二人を放置して、俺は柚子の部屋を出た。
その足で、その隣の部屋、つまりは、俺の自室に戻り、便所に十分ほどこもって暫くマーライオンの気分を味わってから、歯を磨いて、ベッドの上に倒れ込んだ。その後のことは意識がない。

厄病女神夕這う

目が覚めて、ふと窓を見ると、窓が真っ赤に染まっていたので、夕刻だと認識した。窓の外が火事なのかと思うくらい真っ赤であったが、あの赤は夕焼けの色に違いあるまい。火事であればとっくの昔に俺は煙に包まれて呆気なく死んじまってるだろうからな。

ベッドの横にある時計を見ると時刻は六時頃だった。確か、あのアホ漫画家、柚子の部屋から出て、自室に戻ってきたのが朝の九時くらいだったはず。それから今まで太陽が大活躍している時間帯の九時間を睡眠に費やしてしまったわけだ。

「なんだか、一日を無駄にした気がする……」

「確かにそうですねぇー。完全なる昼夜逆転ですねぇー」

独り言のつもりでぼやいたところ、隣にいた奴が同調した。

ぎょっとしてそいつを見る。一瞬、誰かと思ったものの、俺が寝ている間に部屋に侵入し、更には布団の中へまで闖入するような奴といったら厄病女神しか思いつかん。

「貴様、何、勝手に人の布団に入っておるかっ！？」

「夜這いですよー。夜這いー」

絹坂はにかにかと嬉しそうに笑いながらほざきおった。

「夜じゃないだろうが」

「じゃあ、夕這いー」

「そんな言葉はない！」

なんでもかんでも好き勝手に意味が通じそうな言葉を作るんじゃない。一応、日本語には決まった言葉というのがあって、それを用いて日本人は会話をしているのだぞ。そのルールを破って好き勝手な言葉を作って使っておっては日本人に通じない日本語ができてしまい、挙句には日本語が破綻しかねんぞ。これだから、最近の若いもんは正しい日本語が、

「まぁまぁ、言葉遊びなんかどーでもいいじゃありませんかー」

「てめーが始めたんだろうがっ！　とりあえず、布団から出ろっ！」
「えー！　何でですかー！？」
首根っこを引っ掴んで引き摺り出そうとするも、絹坂は頑強に布団からの放出を拒む。俺の体にしがみついてくる。貴様は子泣き爺かっ！？
「くぉらっ！　出てけっつのっ！」
「何でですかー！？　いいじゃないですかー！？　久しぶりの再会ですよー？　元旦以来じゃあないですかー！」
確かに、絹坂に会うのは大晦日から元旦にかけて帰省していたとき以来だ。およそ四ヵ月ぶりくらいではある。
「それがどうした？」
「再会の喜びとか感動とかないんですかぁー！？　こう、心が動かないんですかー？」
絹坂は胸を鷲掴みにして、そこにあるハートが動かないのか！？と妙に暑苦しい顔で訴えかけてくる。てか、ハートを鷲掴みたいなら自分の胸を掴めよ。爪が食い込んで痛いではないか。
「ないんですかぁっ！？」
「ぬわぁいっ！」
無視して、絹坂を引き剥がそうと頭を掴んで引っ張っていると、絹坂が更にしつこく訴えかけてきたので、はっきりと言い捨ててやった。そんなことくらいで俺の心が動揺して堪るか。
「何でですかーっ！？　おかしくないですかぁっ！？」
「何がおかしいというのだ。おら、離れろっ！」
「いや、だってー！　本当におかしいですよーっ！」
絹坂は俺にしがみついたまま、しきりと「おかしい」を繰り返す。貴様は枕草子でも読んでいるのか？
何がそんなにもおかしいというのか？　その理由を問うと、彼女は顔を真っ赤にしてぷりぷりと怒り出した。
「理由が分からないとか意味わかんないですよー！　てか、先輩ー！　わざとですねー！　わざとはぐらかしてますねー！」

「さて、何のことかな？」
「もう！　先輩は酷い人ですー！　鬼ー！　悪魔ー！　鬼畜ー！」
「ふはは。なんとでも言うがいい」
どれもこれも言われ慣れた言葉ばかりだしな。今更、何度呼ばれようとも全く気にならんわ。
「畜生ー！　人でなしー！　うんこー！」
「おいっ！　最後のは違うだろっ！　てか、うんことか言うなっ！」
気の長い俺でもさすがにうんこ呼ばわりには怒らざるを得ない。
「酷いことを言う先輩なんかうんこですよー！　うんこうんこうんこー！」
「うんこを連呼するなっ！　貴様、頭おかしいんじゃないかっ！？」
怒鳴り散らしながら頭を鷲掴み握り潰さんばかりに指に力を入れてやると、絹坂はようやっと「うんこ」を連呼することを止めた。
「だって、先輩が酷いんですよー。先輩が私に会っても何の反応もしてくれないからー」
絹坂はぶちぶちと文句を垂れるが、んな下らんことで「うんこ」呼ばわりされて堪るかってんだ。
「そもそも、先輩が悪いんですー。せっかく、愛すべき彼女と四ヶ月ぶりに再会できたっていうのに全然嬉しそうにしないんですからー」
彼女の言葉に俺は「むぅ」と渋い顔で黙り込む。
確かに絹坂は去年の八月末をもって、俺の二代目彼女に就任している身なのだ。
全く理解できないことなのだが、こやつは高校時代から俺のことを、まぁ、自分自身で言うのも何だが、俺のことを好いていたらしく、時と場合が許せば、四六時中、いつでもどこでも金魚の糞の如く俺に付きまとい、種々のアピールをしてきたものだ。まったくもって、どうして、どう考えても宜しくない人格の俺のことを好いたのかは全く理解できないことだ。酔狂にも程がある。
彼女のアピールは、どう考えても先輩後輩という関係からは繋が

りそうもない言動も多々あった。このことにとんと気付かないほど俺は鈍感な人間ではない。そんじょそこらのラブコメ鈍感主人公どもと一緒にされては困る。

しかしながら、相手の好意に気付くことと、相手の好意に応えることとは全く別である。諸般の事情により男女交際を忌避していた俺は彼女の求愛行為を一年ほどの間、無視し続けた。結果、卒業式の日に殺されかけた。

その後、一年半ほど俺と絹坂の間は音信不通となっていたのだが、去年の七月末頃、厄病女神は夏休みを利用して、突然、俺の部屋に押しかけてきたかと思うと、そのまま寄生しやがったのだ。

その後、まぁ、色々とすったもんだあった挙句、八月末には俺の彼女の座に居座りやがった。この辺の詳細は前々作『厄病女神寄生中』を参考して頂きたい。宣伝と言われてもしょうがないのだが、これ以上、回想説明文を書き並べるのも如何なものか。

とにかく、昨年八月末から、そして、今に至るまで現在進行中で、絹坂は俺の彼女なのだ。遺憾なこととは言い難いが、それに近い。

「普通、彼女が何ヶ月ぶりかに会いに来たら、嬉しがるもんなんじゃないですかー？」

「知らんがな」

「こう、抱き締めあったり、チューしたりしちゃうもんじゃないですかー？　ドラマとか漫画とかで見ませんー？　そーいうのー」

「そんな恥知らずなことするくらいなら死んだ方がマシだっ！」

「そんなに全力否定しなくてもいいじゃないですかー」

「じゃかぁしゃぁっ！　さっさと出てけ！」

いい加減、腹が立ってきて絹坂を布団より追放せんと、手足を駆使するも、しぶといことに関してはゴキブリにも雑草にも引けを取らぬ絹坂が大人しく布団からまろび出る様子はない。

暫しの間、ベッドの上で押し合い圧し合いしていると、不意に掌に何かふにふにと柔らかいものを感じた。思わず、というか、反射というか、意図せず、その柔らかいものをぎゅっと握ってしまった

ところ、
「きゃぅーん」
絹坂が変な声を出した。
「何だいきなり！？　気持ち悪い声を出すなっ！　さぶいぼ出るわっ！」
「なっ！　何ですかー！？　彼女の声を気持ち悪いとか失礼なー！」
俺の言葉に絹坂はぷりぷりと怒り出した。
「貴様が気持ち悪い声を出すのが悪いのだ！」
「気持ち悪い気持ち悪いって失礼な人ですねーっ！　普通、彼女相手にそんなこと言いますかーっ！？」
「やっかましぃわいっ！　とにかく、ベッドから降りろっ！　落ちろっ！」
「嫌ですーっ！　先輩と一緒の布団で寝るのーっ！　そして、愛の営みをーっ！」
「うるせぇっ！　ベッドから落ちろっ！　地獄へ落ちろっ！」
近過ぎて互いの唾が顔にかかりまくるのも構わず怒鳴り散らし続けると、十分ほどで喉が痛くなってきたので、とりあえず、自然と休戦となり、互いにぜぇぜぇ言いながら布団に包まった。
絹坂がすんすんと鼻を鳴らして呟く。
「ふふ、先輩の臭いがしますー」
「気持ち悪いことを抜かすな」
「もう気持ち悪くてもいいですよーっだー。とにかく、私は先輩の側にいられるだけで幸せなんですー」
絹坂は嬉しそうに目を細め、俺の胸にすりすりと顔を擦り付けてくる。むぅ、俺のキャラ的には押し退けて蹴っ飛ばして踏み潰すくらいやらんといかんのだが、さすがに、ここまで懐かれ、甘えられていると、無下に扱うのも難しい。散々騒いだり怒鳴ったり押し合い圧し合いして疲れたので、そのままにしてやっている、ということにしよう。うむ。
困ったものだと頬を掻きながら、ふと、人影があるのに気付いた。

長い髪を後ろで一まとめにした女だ。そして、背が高い。思いつく人物は一人だ。

あぁ、まーた面倒臭いことになるぞ。と俺の第六感が告げている。

しかし、どうしようもないのは口惜しいことだ。

厄病女神と京島都再び

京島都はいつも無愛想な無表情顔で、男らしいというかぶっきらぼうな話し方をする俺と同い年の娘だ。ただ、凄く真面目な印象がある。

女にしては背が高く一七〇ｃｍ半ばはある。くっきりとした目鼻立ちの凛々しい顔つきで、艶やかで長い黒髪を平素は後ろ下方で一つに纏めている。

さて、この京島都と俺には少なからぬ縁がある。まず、俺が通う大学の同じ学部の学友で、我が部屋に毎朝、新聞を届けてくれる新聞配達員（バイト）で、あと、あー、俺のことが好きだと過去に告白してきた相手であり、あー、

「はっ！　な、何でこの人がうちにーっ！？」

と、ここで、俺にひっついてゴロゴロしていた絹坂が部屋の隅に立つ京島に気付いて素っ頓狂な声を上げた。

「なっ！　何しにきやがったーっ！？」

絹坂は騒がしく喚きながらベッドの上に立ち上がり、京島を指差して叫んだ。警戒感バリバリだ。

まぁ、致し方ないかとは思う。絹坂にとっては、恋のライバルというか敵なのだからな。

京島はかつて絹坂と俺の恋人という座を巡って争ったことがあるのだ。その当人である俺が言うとなんか自慢みたいでなんとなく後ろめたい気分になるな。特に悪いことはしていないはずなのだが。

「え、えっと、こんばんは」

保健所職員に対する野良猫のように敵愾心バリバリな絹坂と、暫し静観している俺に対して、京島は低姿勢にまずは挨拶。さすが、京島だ。人ができている。知人の中では最もよくできた人間だと俺が評価しているだけある。

「おう」

俺は軽く手を挙げて挨拶。素っ気無い挨拶だが、これはしょうがない。俺は昔から挨拶がどーも苦手なのだ。無愛想で短気で気難しい性格な上に、挨拶まで不自由では円滑で健全な人間関係は作り難い。だから、俺の持つ人間関係はどれもこれも歪だったり腐れ縁だったり変な形だったりするのだろうな。

まぁ、それはさて置き。挨拶を交わした京島は、暫し俺と絹坂を見つめてから、思い出したように言った。

「そうだ。ビーフストロガノフを作ってきた」

確かに、それらしき独特の臭いがする。と、それを意識すると急に腹の虫が騒ぎ出した。そういえば、今日は朝からずっと寝ていたから何も食っていないのだ。考えれば、まだ顔も洗ってないし、歯も磨いてないぞ。やや、昨日から風呂にも入っていない。

「な、なんで、この人が先輩に、び、びーふ、すとろがのふ？を作ってきてるんですかー！？」

絹坂が騒ぐ。

まぁ、騒ぐのも当然といえば、当然である。

一応恋人という身分にある厄病女神こと絹坂が、遺憾ながらその相方である俺の部屋に来たところ、何でか、平然とその俺と同学部の友人であり、かつて俺に何故だか告白してきたことがある京島がビーフストロガノフ持ってやって来たともなれば、俺の彼女身分にある奴にとっては大事以外の何者でもあるまい。絹坂は俺と京島の間柄を知っており、その間に過去何があったかも承知しているので尚更である。

この状況は俺が判断するに修羅場というものではないか？

「先輩ぃっ！　一体全体これはどーいうことですかっ！？」

絹坂は怒髪天を突く勢いで俺に詰め寄ってきた。

「な、何をそんな怒っているんだ？」

「怒るに決まってるじゃないですかっ！？」

俺の疑問に絹坂は吼える。

「だって、これ！　これ！　ほら！　えっと！　ねえ！」

絹坂は、俺と京島を何度も交互に指差して、拳を振り回して、騒ぎまわる。
「おい、落ち着け。日本語になってねーぞ」
呆れた俺が声をかけると、絹坂は血走った目で一瞬俺を睨んでから、目をつぶってすーはーふーっと深呼吸した。
それから、きっと俺を見て口を開く。
「先輩」
「何だ？」
「何で、京島さんがここにいらっしゃるんですかー？」
「うぅむ」
絹坂の質問に、俺はとりあえず唸っておく。何で、京島がここに来ているかというと、まぁ、それには複雑な事情があるっていうわけじゃあないのだが、どう説明したものか。
ふと、残りの一人を見ると、京島は鍋を持ったまま所在なさげに突っ立っていた。
「とりあえず、京島。その鍋を台所へ。絹坂、布団から出れ。話がし辛い」

俺たちは寝室から居間みたいに使っている部屋へと舞台を移した。
一人で使うには十分、二人だと少し狭いくらいの、ちまっこいテーブルに俺たちは着いた。俺の隣には絹坂が陣取っていて、俺の腕を掴んでいる。その向かいにジャージ姿の京島が居心地悪そうに正座している。
「で。何で、京島さんが先輩の部屋にー？　そもそも、何で、こんな時間にここにいるんですかー？」
絹坂が刺々しい口調で問う。
確かに、時刻は既に夕刻過ぎであり、そろそろ、日も沈もうという時間帯である。
「確か、京島さんの家はだいぶ離れたところにー」
「いや、京島は今ここに住んでるんだ」

「こ、こ、にーっ！？」
「ち、違うっ！　俺の部屋にって意味じゃない！　この木暮荘にだってことだ！」
修羅の如き形相をした絹坂を慌ててなだめる。
「木暮荘にですかー？　どうしてですかー？　今まで、自宅から通学していたのにー」
確かに、京島は大学入学後一年ほど自宅から通学していた。
しかし、困ったことに、京島は自宅である、アパートの部屋から出なくてはならなくなったのだ。
「それはだな」
言い淀む俺に代わって京島が口を開く。
「あー。私がずっと住んでいたアパートが、あー、火事で焼けてな」
「火事ですか？」
「うん」
「あの火でぼーぼーの？」
「うん」
不運にも京島は真冬に火事でアパートを焼け出されてしまったのだ。
さて、どうしたものかと。途方に暮れた京島はどーいうわけだが、俺に相談してきた。何故、俺なのかといえば、大学内に、他に相談できる相手がいないからだという。最も話し辛い奴として有名な俺しか相談相手がいないとは、全く妙なことだ。
まぁ、それはさて置き。その時、聞いたことだが、京島家は両親が既に亡くなっており、援助してくれる親戚もおらず、自治体の補助金や京島のバイトなどでなんとかかんとか生きてきたような、もう絵に描いたような不運な娘であった。こいつを主人公にして小説を書けば小金を稼げるのではないかと、真剣に思うほどである。
そのような事情を聞いた俺は手立てを考えることにした。全くどーでもよさそうな奴であれば、堂々と放り捨てることを躊躇しない俺ではあるが、京島は知らぬ仲でもなく、その不幸性は俺の限りな

く少ない同情心をくすぐるに値した。しかも、俺は数ヶ月前に、彼女を振っているのである。負い目があるのだ。そして、何とも都合が良いことに、俺には京島の窮地を救う手に心当たりがあったのだ。

俺が住んでいる木暮荘は、非常に家賃が安くされている。というのは、ここがあまり営利を目的としたアパートではないからである。ここの大家である人物は俺たちの先輩に当たる現役大学生で、何の因果かこのアパートの大家の座を手に入れ、知り合いや気に入った奴を入居させているのだ。その為、必要最低限な管理費や修繕費と大家の酒代を賄えるくらいの家賃しか徴収していないのである。

そのてきとーな不動産経営をやっている大家と俺は親しい友人であり、京島も知らぬ仲ではなかった。そこで、俺が仲介人となって木暮荘に移住できるよう取り計らったのだ。京島は怠惰な大家に代わって管理人を務めることで家賃を更に割り引いてもらい、かなり楽な生活ができるようになったらしい。

そのことを恩義に思ったのか。京島は日々俺の部屋を訪れて夕飯のおかずをお裾分けしてくれたり、俺の部屋を掃除してくれたり、俺の服を洗濯してくれたり、

「ちょっと待ってくださーいっ！」

今までの経緯を説明していると突如絹坂が叫んだ。

何だ。人の話の途中に。

「ちょっと待ってくださいよーっ！」

待っとるっちゅーねん。

「何ですかそれっ！？　それ、おかしくないですかっ！？」

「何がだ？」

「だって、そもそも、先輩、告白してきて振った人がちょくちょく部屋に来て気まずく思ったりしないんですかー？」

「そりゃあ、確かに気まずいは気まずい」

「じゃあ、何で、ちょいちょい部屋に来るのを許容しているんですかー？」

うぅむ。言われれば確かにそうなのである。そうではあるが、し

かし、はっきり言って俺は家事が得意ではないし、好きでもない。というか、嫌いだ。家事をやってもらうのは非常に楽である。夏休み中、厄病女神が俺の部屋に寄生している間、そいつを追い出さなかった理由の一つは、絹坂が家事をやってくれたことであることは否定できない事実である。

しかしながら、恋愛感情の縺れは置いておき、同じアパートに住んでいる同じ学部の友人とのコミュニケーションは、健全な御近所関係といって差し障りないのではないかと思うわけだ。その二つは、完全に別個な人間関係であり、これはこれ、それはそれである。という脳内言い訳を駆使してきたわけだが、しかし、これも苦しい言い訳だな。

「それ、完全に京島さんの外堀埋め戦術じゃないですかー」

やっぱり、そう思うか。

「先輩の浮気者ー！　裏切り者ー！　うんこー！」

「浮気なぞしておらんし、裏切ってもおらん！　そして、何で、また、うんこやねんっ！？　うんこ言うなっ！」

こいつ、俺の嫌がる悪口がわかった途端、それを多用しやがって、腹が立つったらしゃーない。腹が立つついでに腹が減ってきた。しかし、風呂にも入っていない状態で飯を食うのもアレだな。

「彼女がいない間に、別の女を部屋に連れ込むなんて浮気以外の何者でもありませんよっ！　浮気は恋人に対する裏切り行為ですよーっ！　そんな先輩はうんこですよーっ！」

「だから、うんこはやめろってのっ！　あーっ！　もうっ！　やかましい。俺はちと風呂に入ってくる」

少し文章の繋がりが変ではあるが、そうでもせんと風呂に入れそうにないからな。

「はー？　何で、いきなり、風呂入るんですかー？」

「昨日、入ってないからな。風呂出たらビーフストロガノフを食う。腹が減ってしょうがないのだ。話はそれからだ。いいか？　分かったか？　ＯＫ？」

「むぅ。分かりましたー」
絹坂は不満そうに頬を膨らませたが、渋々と頷いた。
というわけで、俺は問題を丸投げというか延期させた。

厄病女神風呂に乱入す

風呂場に入った途端、睡眠を取っていたおかげで一時的に落ち着いていた吐き気が一挙にこみ上げてきて、風呂場の排水溝にゲロを注ぎ込んで嫌な気分になってから、シャワーを浴びた。当然、湯船には湯など張っていないので、シャワーのみの風呂になる。暦の上では既に春とはいえ、未だ早春である。屋内とはいえ、暖房なき風呂場にて裸でいると少々肌寒さを感じるものの、致し方あるまい。早々に湯を浴びれば風邪をひくような事態には至るまい。

排水溝から仄かに立ち上る忌々しい香りをかき消すようにシャワー全開で頭からざばざばと湯を浴びながら、暫し黙考する。

さて、今の状況をどうすべきか。

一応彼女である厄病女神がやって来て、そこへ、いつも俺の部屋の家事全般をやってくれていた京島が来て、二人が鉢合わせ。そして、絹坂が怒る。当たり前といえば当たり前であり、誰が悪いかっていえば、まぁ、強いて言えば、認め難いことではあるが、俺が悪い、かもしれない。

俺が京島の申し出を丁重にお断りして気持ちだけ頂いておけば問題なかったのかも。

しかし、そうは言っても、こうなってしまった事実は如何ともしがたい。困ったものだ。

困った困ったと俺が頭を悩ませていると、背中がぞくぞくしてきた。何だ。まさか、メリーちゃんか？　という思いが一瞬頭の片隅を掠めるも、すぐに、これはただの寒気だと分かった。背中に冷たい風を感じるのだ。何故か？　確かめずとも分かる。風呂に入っているとき、ドアを開けてみるがいい。シャワーの湯気で温められた風呂場内の空気よりもドアから入り込んでくる空気の方が冷たいであろう。

「くぉらぁっ！　何で、ドアを開けたぁっ！？」

振り返って怒鳴り散らす。
思ったとおり、ドアは開けられていて、絹坂のマヌケ面がそこにあった。
「いやぁー。お背中をお流ししようかなーと思いましてー」
「いらん！　ていうか、何故、ドアが開いておるんだ！？　鍵を閉めたはずだぞ！？」
「風呂場の鍵って家の鍵と同じ場合がよくあるんですよねー」
そうだったのか。いや、一人暮らしだと風呂に入るとき、わざわざ鍵を閉めるようなこともない故、どんな鍵がついているのか分かっておらんかった。
「さぁさぁ、先輩、お背中をお流ししましょー」
絹坂は先の俺の言葉を全く聞いていなかったらしく、とっとこ風呂場に上がりこんできた。
「だから、いらんっつっておろうがっ！　入ってくんなっ！　出てけっ！」
「えー。そんなー。一糸纏わぬ年頃の娘を外に放り出そうっていうんですかー？」
「何も外に出ろとは一言も言ってねーだろうがっ！　居間で大人しくしておれっ！」
「ほうっ！　ということは、この部屋にいてもいいってことですねー。これから何年間か宜しくお願いしますー」
「誰がぬなこと言ったっ！？　だから、入ってくんなっつの！」
俺の言葉をさらっと無視して絹坂はずかずかと風呂場に闖入してきた。何も身に着けていない生まれたまんまの姿だ。水着もタオルもない。つまり、全裸だった。まぁ、俺もだが。風呂の中ゆえ当然といえば、当然ではあるが。
「さあさあー、お背中お流ししますよー。ほらー、先輩先輩、そちらに座ってー、ゆるりとしてくださいー」
「いや、出てけっつのっ！」
「何でですかー？」

「何でって……」
問われて、言葉に詰まる。
「そもそも、お互いの裸なんてもう見慣れてるじゃないですかー。主にベッドの上とかでー。えへ」
そう言って絹坂はだらしない顔でえへえへと笑い出した。気持ち悪い奴だな。
「そんな何度も見ているわけではあるまい。えーっと、五回くらいだろ」
「六回ですよー」
一々数えているのか。阿呆らしい。
「とにかくだ。とっととここから出て行くがいい。いい加減にせんと蹴り飛ばすぞ」
「嫌ですー。出ていかないですー」
こいつ、ムカつくぞ。
俺は短気でかなり喋る方ではあり、勢いだけで言葉にしてしまうという欠点があるのだが、しかし、俺は有限実行の人でもある。勢いだけで言ってしまったこともかなりの確立で有限実行する。己の言葉に責任を持つのだ。
俺は先の言葉どおり行動した。つまり、絹坂を蹴飛ばした。
「くのっ！　出てけっ！」
「ぎゃーっ！　マジで蹴るなんて酷いですーっ！　DVだっ！　DVだーっ！　DVDだーっ！」
「DVD違うっ！　いいから、さっさと出てけっ！」
「嫌ですーっ！」
俺と絹坂は再び押し問答を始め、俺はすぐに強硬的な物理的行動に出たが、その俺の脚に絹坂がしがみついてきた。これでは、蹴り出すことも、俺が外へ脱出することも不可能だ。
暫く、お互いを罵り合いながら、風呂場でどったんばったんしていると、俺はうっかり足を滑らせて絹坂もろとも転倒した。俺はけつやら腕やら背中やらをあちこちにぶつけて、すっかり戦意を喪失

し、各所からの鈍痛に悲鳴を上げる。
「いだいっ！　けつを打ったぞっ！　腕も痛いわっ！」
「先輩が暴れるからいけないんですよー」
足元にいた絹坂は被害が少なく、平然と俺に抱きついている。
「さあさあー、いい加減、暴れるのは諦めてくださいー」
マウントポジションにある絹坂はにこにこと笑いながら俺を見下ろして言った。
事ここに至っては最早止むを得まい。第一、俺は転倒して痛む箇所を体のあちこちにこさえた結果、すっかり抵抗意欲を失っていた。最早、怒鳴るのも億劫になってきて、背中を流させるくらいならば良いかという気分になった。
「非常に不満この上ないが、止むを得まい。勝手にしやがれ」
「はーい」
俺は思いっきりしかめ面で渋々と風呂場椅子に腰掛け、ドア側にいる絹坂へ背を向ける。
絹坂は何が楽しいのかにこにこと笑いながら、石鹸で泡立てたタオルで俺の背中を洗い始める。
と、再び、ドアが開く音と気配。
今度は何事か。と俺と絹坂が振り返った先には、タオルで辛うじて胸やら股やらを隠している京島が真っ赤な顔をしていた。
俺と絹坂が呆気にとられて何も言えず何もできずにいると、京島はいそいそと風呂場に入り込むと、ドアを閉め、微かにぷるぷる震えながら仰った。
「わ、私も手伝おう……」
「「はぁっ！？」」
奇しくも、俺と絹坂は全く同じ素っ頓狂な声を上げた。
叫び声は同じではあったが、含んでいるものは大きく違う。俺のは驚き百パーセントだったが、絹坂の叫び声には驚きの他に疑念と怒りを含んでいるようだった。眉間に皺を寄せ、目尻を吊り上げ、口をへの字にして、額に血管を浮かべている。こいつも怒ろうと思

えば怒れるらしい。こいつはいつ見ても大抵へらへら笑ってるかぶーたれているからな。怒り顔を作れるとは意外であった。
「一体何を言っているんですかー？」
絹坂の言葉は刺々しい。思うのだが、こいつは妙に京島に辛く当たっているような気がするな。いや、立場を考えれば当然っちゃあ当然なんだが。しかし、よくよく考えると、絹坂は俺に対するときと他の人間に対するときの態度がかなり違っているような気がしてきた。どっちが本物だ？
「今の状況がどーいうものかわかって言ってるんですかー？　そもそも、京島さんって、自分の立場分かってますー？」
絹坂の言葉は、語尾がだらしないのはいつもどおりではあるが、かなり刺々しく、酷く印象が悪い言い方だ。嫌味な敵役みたいではないか。
睨まれ刺々しい言葉で責められた京島はいくらかたじろぎつつも退くことはなかった。
「わ、私も、彼には世話になっているから、せめて、恩返しを」
「はっ！　まさか、今までも恩返しと称してこんなことを先輩にしていたわけじゃあないですよねっ！？　先輩っ！　どーいうことですかっ！」
「んなわけないだろっ！　黙ってそこまでされるほど俺だって鈍感ではないわっ！」
絹坂はじと目で俺を見て、京島を睨む。
「とにかく、出ていって下さいよー。これから、私と先輩は、恋人同士、愛を深め合うのですからー。京島さんは台所でびーふすとろがのふとやらを温めていればいいんですー」
嫌味な台詞を吐く絹坂。全くもってヒロインの言葉とは思えない。
だが、そんな絹坂の嫌味台詞にも京島はめげないのであった。
「いや、私にも、是非、彼に恩返しの為、背中を流させて欲しい」
「だめーっ！　だめですーっ！　先輩の背中は私だけのものなんですーっ！」

なんだか京島の方が健気なヒロインに見えてくる。絹坂の言動は独りよがりで我侭なガキのようだ。何で、俺、絹坂と付き合っているんだ？

とはいえ、どれほど感謝していたとしても、うら若い娘が恩返しに男の背中を流すってのは非常識極まりないのは事実だ。まぁ、京島としては、今まで邪魔者（絹坂）がいない間にちまちまと外堀を埋めて、恋人の座を奪取しようと目論んでいた（或いは、別れた後の後釜を狙っていた）ところ、急に邪魔者が再来して、急接近するものだから、焦って深くも考えずとりあえず邪魔者と同じ行動を取ってみたというところだろうか。そう考えると、京島も中々クールに見えて単純で考えなしな奴だな。

そもそも、何だって、俺は絹坂やら京島やらに背中を流されなきゃならんのだ。それくらい、一人でできるっつの。俺は介護老人じゃあないのだぞ。

言い争いをする二人の娘を放置して黙々と考えていると、なんだか、現状が酷く馬鹿らしく思えてきて、かなりイライラしてきた俺は黙ってさっさと自分の体を洗うと、絹坂と京島を押し退けて風呂を出た。

「アレッ！？　何で、先輩、お風呂出ちゃうんですかー？」

「ま、まだ、恩返しをしていないのだが……」

「やっかましいっ！　貴様らが騒いでいるうちに体なんぞとうに洗ってしまったわっ！　そんなに風呂が好きなら二人で暫く入っていろっ！」

俺は二人を怒鳴りつけてから、ドアを閉めてやった。更に素早く洗面所を出て、外開きである洗面所のドアを閉め、その前に手近にあった冷蔵庫を苦労して移動させて配置して内側から開けられないように細工した。これで、二人を洗面所内に幽閉することに成功したわけだ。うむ。

「わーっ！　開かないですよーっ！？　先輩、何してるんですかーっ！？」

「わ、私まで、閉じ込めなくてもいいじゃないか。というか、タオルだけでいるのは恥ずかしいのだが……」
「タオル一枚になったのは自分でなったんじゃないですかーっ！　ちょっとスタイルいいからって調子に乗ってーっ！　きーっ！」
「わぁっ！　ちょ、待って！　胸を揉むなっ！」
洗面所から聞こえてくる馬鹿馬鹿しい喧騒に耳を塞いだ俺はさっさと着替えてから、台所に置かれていた京島お手製のビーフストロガノフを温め直した冷ご飯と一緒に頂き、また、少し眠くなったので、ベッドに潜り込んだ。
「おーい。先輩ー。もう夜なんですけどー、いい加減、出してくれませーんかー？」
「すまないが、そろそろ、出してくれないか？　もう十分に頭は冷えてると思うんだが……」
聞こえない聞こえない。

厄病女神風呂に乱入す（後書き）

何でだろう。お風呂シーンなのに、あんまり色っぽくない……。

厄病女神のいる朝

目が覚めると、朝であった。ここ最近、卒業する先輩方の送別会やらこの不景気で就職先から内定を貰えなかった先輩方の残念会やら卒業できなかった先輩方の留年おめでとう会やらこれ以上留年できず大学を放逐される先輩方を偲ぶ会やらと、まぁ、名目は何であれ、とにかく、毎夜毎夜飲み会飲み会のオンパレードで、毎朝毎朝二日酔いに見舞われ、朝から便器に向き合って、昼間は頭痛と気持ち悪さと腹痛に悩まされ、夕方にはだいぶ気分が良くなり、夜にはまた飲み会というのが最近の俺の生活習慣であったのだが、今日の朝は二日酔いの症状もなく、中々にすっきりとした体調であった。

「気分が良い朝だな。何故だろうか？」

ベッドから起き上がりながら考えるとすぐに合点がいった。

そうだ。俺は、昨日、徹夜した後、朝から散々吐いた後、すぐに寝て、夕方に起きて、その後、胃の残りを更に吐瀉して、更に寝たのだった。ほとんど一日吐くか寝ていたから酔いも何も全てなくなってしまっているのだろう。当然といえば当然である。

本日は天下の休日日曜日である為、今日はゆっくりと過ごすこととしよう。

そう考えながら洗顔を行う為、洗面所に向かった俺は驚愕した。

なんと、洗面所が冷蔵庫で封鎖されているではないかっ！

「これは、どーいうことだっ！？」

叫んでから、思い出す。

あぁ、そうだ。俺がやったんだった。この中には忌々しい厄病女神とついでに京島都が封印されているのだった。

自分でやっておいて忘れるとか。記憶力の減退が嘆かわしいな。

「しかし、何だって朝一番の寝起き直後から、こんなことをせねばならんのだっ。クソッタレめっ！」

冷蔵庫をガタガタ移動させながら、一人でぶちぶちと悪態を吐く。

障害物を取り除き、洗面所に入り、顔を洗う。
洗顔していると、背後から恨めしい声が聞こえてきた。何だ。また、メリーちゃんか。いつまで引き摺るんだこのネタ。
「ぜーんぱーい……」
全敗？　全廃？
頭の中で疑問符を浮かべていると、
「せーんぱーいー」
という声と共に、背後から何者かが抱きついてきた。いや、誰だかぼかす意味などない。こんな台詞を言いながら抱きついてくる奴の覚えは一人しかいない。
「先輩ー。ひどいじゃないですかー。一晩こんなところに閉じ込めるだなんてー。先輩のばかばかばかー」
「ヴぉいっ！　人が顔を洗っているときに叩いてくるなっ！」
背中に抱きついて頭をぽかぽか叩いてくる絹坂を一喝してから、俺はしっかりと洗顔した。
顔をタオルで拭いた後、振り返ると、絹坂と京島がバスタオル一枚で俺を睨んでいた。
「何だというのだ」
「何だというのだじゃありませんよー！　私と京島さんを閉じ込めて、一晩放置って、ひどい放置プレイですよー！　夜になってどれほど寒かったかー！」
絹坂はぷりぷりと怒っている。
あぁ、そういえば、確かに、季節は春とはいえ、まだ夜は冷えるな。暖房設備もなく、着るものもない洗面所及びトイレ及び風呂では寒かったかもしれん。
「お陰で、体を温める為に、ずっとお風呂を温めては入りっぱなしでしたよー！　そのせいで、なんか、体がふやけてる感じがしますー！」
絹坂の言葉に京島も強く頷いた。
なんだか、すまんことをしたのかもしれんな。

「まぁ、何だ。さっさと着替えろ」
「うきーっ！　言うことはそれだけですかーっ！？」
絹坂が喚くのを無視して俺はのんびり歯磨きをしていた。
絹坂と京島は俺の背後でなんだかんだとわいわい騒いでいたが、そろそろ、寒くなってきたのか。くしゃみをしながら居間へ向かっていった。
というか、貴様ら、着替えを洗面所に置かず、居間に置いていたのか。まぁ、うちの洗面所狭いからな。

朝の身支度を済ませた俺たちは居間でのんびりと昨夜京島が持ってきたビーフストロガノフを食いながらテレビを眺めていた。
「まったく、先輩ったら、本当にSですねー。こんなに酷い仕打ちをするなんて考えられませんよー」
「うるさいな。黙って食え。うん、美味い」
「あ、ありがとう」
「何で、京島さんを褒めてるんですかー！」
「何でって、京島が作った飯だからだろうよ。貴様、自分の言ってる意味知ってる分かってるのか？」
「け、喧嘩は、止めて。ほら、えーと、おかわりは？」
「いる」
「くださいー」
台所へ向かった京島を見送りながら、絹坂を見る。
「そーいえば、貴様。うちの大学に進学したんだったな」
「えぇ、そーですよー。先輩を追いかけてきちゃいましたー」
俺の言葉に絹坂は阿呆っぽくへらへら笑いながら答える。何が、そんなに楽しそうなのか全く意味不明だな。
「それで、何で、ここに来ているんだ？　お前、準備とか色々せんとならんのじゃないか？」
俺と絹坂の地元は大学のあるここからはかなり離れた場所にある為、俺たちは大学進学にあたって転居が必要となる。ただの転居で

も引越しやら何やらで色々とせねばならんことがあるというに、それに加えて大学進学の手続きやら何やらもあり、やらねばならぬことが山ほどあるはずだ。俺の部屋でごろごろしている暇などあるのか？

「ふぇ？　えー？　あるえー？　言ってませんでしたっけー？」

絹坂は首を傾げ傾げしながら呟く。一体、何が言いたいというのだ？

「あ。そうだ」

彼女はそんなことを呟くと、俺を見て、にやにやと笑い出す。何だ。気持ち悪い。

「うふふー。いやぁ、まーだ、ちょっと、引越しの支度がまだでしたねー。準備ができるまで、少しの間、ここに置いて下さいよー」

「はぁ？　何でだ」

「何でだって、それ、おかしくないですかー？　彼女なんですから、いいじゃないですかー。それにー、私、居候できる先なんて、ここしかありませんしー」

まぁ、言われてみれば、確かにそうなのだが、どーにも、昔からの癖というか、習性で、絹坂の言葉は全て最初否定から入ってしまう。あんまり、悪い習性だと思わないのは何故だろうか。

「まーた、寄生する気か。まぁ、致し方ないかとは思うが」

「まーまー、いいじゃないですかー。何日かしたら、引越し先の部屋の準備ができるんで、そっちに移りますからー」

絹坂はにこにこと笑いながら言ってきた。

「むぅ。まぁ、いいか」

「えぇー。いいんですかー？」

「ダメだ言っても強制的に居つくのであろう。貴様をどうこうしようなどというのは最早不可能の域にあるのだ」

「わーい。ありがとうございますー」

皮肉の効かん奴だな。

ふと、視線を感じると、おかわりを持ってきた京島が不思議そう

な怪訝そうな顔をして突っ立っていた。
「何で、そんなところに突っ立っているのだ？」
「え。あ、いや、えーっと」
京島はとりあえず座って、俺と絹坂におかわり分を渡してから、まごまごとしていた。何か言いたそうな気配だ。
「何だ？」
「あ」
「そうだ。京島さん、ちょっと教えて欲しいことがあるんですけどー」
京島が口を開いた瞬間、絹坂が割り込んできた。
何事かと思えば、絹坂の聞きたいこととは、近所のスーパーはまだ残っているのかとか。商店街の店に変わりはないかとか。といったような他愛もないことだった。んなこと、今、京島にわざわざ聞かなくてもいいんではないかと思うが、まぁ、人の会話に文句をつけることもないか。
しかし、この二人は一晩一緒にいただけあって、関係はやや改善されているようだな。面倒くさいことが少し減って何よりである。

厄病女神と謎の組織

あるうららかな初春の日の午前。
ベッドに潜り込んでくるというふざけた起こし方で厄病女神に起こされた俺は、朝飯を食ってから、特にすることもなく部屋でゴロゴロと古代ペルム紀の生物大絶滅についての本を読んでいた。
ペルム紀は今から三億年から二億五千万年前の超大陸パンゲアが形成された時期で、それに伴う火山活動の活性化により温暖化が進み、海水温が急上昇し、海底のメタンハイドレードが大量に気化し、更なる温暖化を生み出していった。酸素と反応するメタンが大量に放出されたことで酸素濃度は急減し、全海洋で酸素欠乏（スーパーアノキシア或いは超酸素欠乏事件）と呼ばれる現象が発生する。また、同時期に直径五〇ｋｍもの巨大隕石が衝突したと考えられている。これらの要因によって、地球上の全ての生物種のおよそ九割からそれ以上が絶滅したという地球史上最大の大量絶滅が発生している。この大量絶滅によって古生代にわたり最も繁栄した三葉虫も絶滅している。これ以降、世界は爬虫類、つまり、恐竜の時代へと移ろっていく。ちなみに、このペルム紀の陸上で多く見られたのは哺乳類型爬虫類とも呼ばれる単弓類で、彼らは次の爬虫類の時代（三畳紀・ジュラ紀・白亜紀）に衰退していくが、やがて、一部が哺乳類へと進化し、我々の時代へと移ろっていくのである。
しかし、これらは、俺が大学で学んでいる内容とは全く関係がない。単なる趣味である。
と、そんなふうに地球の気候変動と生物の絶滅について勉強していると、携帯電話が鳴った。
「はい、もしもしー。冴上ですー」
「おい、貴様。何、普通に俺の携帯電話に出てるんだ。貸せ」
勝手に携帯電話に出ていた絹坂から携帯電話を奪い取る。
「もしもし？」

「あー。冴上君？」
「はい。仁井見先輩ですか？」
声から察しをつけて確認する。仁井見先輩は、俺が所属している、とある組織の先輩だ。確か教育学部の三年じゃない春から四年だったはずだ。
「そうそう。ところで、さっきの女の子は誰かなー？　彼女？」
「違いま……」
咄嗟に否定しようとして、ふと口が止まる。大変遺憾ながら違くないのだ。忌々しい。
「ははは。まぁ、いいよ。今はちょっと急用だからね」
少し真面目な空気をまとった仁井見先輩の言葉に俺はあることにすぐ思い至る。
「用事っていうのは、午後の頭取会についてですか？」
「察しがいいね」
「そりゃあ、今日のことですからね。で、話っていうのは、頭取首座の件ですか？」
頭取首座とは、まぁ、俺が所属する組織の実質的なトップのことであり、その頭取首座を選出するのが今日の午後予定されている頭取会の重要な議題であった。
組織の最高幹部（通称頭取と称される）は年度が終わる直前に次期幹部を選出する慣例なのであるが、その頭取を代表する頭取首座は年度始めの頭取会で頭取の中から多数決で選ばれる慣例なのである。
「うん。そう。音沢君は本気で首座を狙ってきているみたいだよ。君はどうなの？」
音沢か。法学部の三年だな。俺と同学年だが、一年浪人しているから、年は一つ上だったはずだ。卒業生の引退に伴って、幹事長職に就任している。そこそこ、交流はある相手だが、どーにも、あまり馬が合わない。
「俺は自薦はしませんよ」

「じゃあ、他薦されたら、なる気はあるの？」
「それは、あー」
「ははは。冗談だよ。まぁ、幹事所は長く首座を出していないからね」
「歴代首座になった幹事長がイマイチの人ばかりでしたからね」
「うん。歴代、幹事所出身の首座には、何でかろくな人がいないんだよねー。初代首座の笹場幹事長は小学生をストーキングしていたことが問題となって辞任。国府野幹事長はペットの鳩を人質に取られて、脅迫に屈して辞任。廣井幹事長は財政の建て直しに失敗して辞任」
　確かに、ろくでもない奴しかいない。とはいえ、他の首座の辞任の原因も、組織の金をバラまく汚職が露見したり、マザコンだったことを暴露されたり、ラブレターを公表されたり、と、ろくな理由ではないのだが。まともに政権を維持できたのは歴代一九人いる首座のうち五人しかいないのだ。他のお歴々は何らかの原因で、辞任したり、頭取会で解任されたりしているのだ。まぁ、幹部連中がどいつもこいつも隙あらば他の幹部を引き摺り落としてやろうと画策しているのが第一の原因のような気がしなくもない。
「そうそう。こんな雑談している暇じゃなかった。で、君は、誰に票を入れるつもりなの？」
　単刀直入だな。
「そーいう仁井見先輩はどうなんですか？　ご自身が？」
「僕はやらないよ。僕の先代の緑川先輩が首座だったからね。まぁ、半年だけの政権だったけどさ。しかも、ほとんどれレームダック状態」
　あぁ、先代の頭取首座である緑川先輩は、一応、卒業まで頭取首座だったが、風紀粛清・緊縮財政を掲げて、厳しい組織運営に挑んだが、反発が大きく、ほとんど失脚していたからなぁ。組織をまとめるというのは難しいことだ。
「僕は中鹿君を推そうと思っているんだよね」

中鹿先輩か。組織の財政を担当する勝手方をまとめる勝手方頭取を務めていらっしゃる。経済学部の四年で、俺はよく知らん。たまにうちの部署の予算を無心するときにしか会わないからな。
「何でですかね？」
「君、うちの財政のヤバさ知ってる？」
「あー。まぁ、そこそこ」
「もう十年くらい前から財政健全化はうちの重大な課題の一つだよ。それが未だに解決されていないのは大きな問題だとは思わないかい？　そこでだ。経済学部で、経営学とか何かそんなのを勉強しているらしい中鹿君に組織運営を任せてみようとは思わないかい？　彼は、温厚で公平だしね」
「そーなんですか」
「そーなんですよ」
うーむ。
「まぁ、考えておきましょう」
「うん。よろしく」
そうして、電話は切れた。
うーむ。どーしたもんかなー？
「先輩先輩ー。今の電話は何ですかー？　頭取とか首座とか幹事長とかって何なんですかー？」
「貴様には関係のないことだ」
絹坂はじと目で俺を見てくる。ムカつく顔だな。何が言いたいというのだ？
「先輩ったらー、まーた、高校のときみたいにー、学校当局とその傀儡と化している生徒会を打倒しー、生徒による生徒のための生徒の学校政治を実現するのだーとか言って、先生相手に悪戯して怒られたりー、生徒会に無理難題押し付けて泣かせたりー、学校行事に茶々いれたりしているんですかー？」
高校時代、俺と絹坂は共にそんなふうな組織に所属していて、高校生活を基本的には概ね面白おかしく楽しく過ごしたのである。俺

と絹坂が親しくなったのもこの組織の活動を通じてである。
だが、しかし、その組織も実態はどうであれ建前はもっと真面目な活動目標を示していたはずだ。
「貴様、組織のことをそんなふうに考えていたのか？」
「違うんですかー？」
聞き返されて、些か困る。相手が組織の実態を知らぬ外部者やらであれば、いくらでも詭弁を弄して組織の崇高なる存在意義と活動目標について語り尽くしてやるところだが、組織に所属し、俺の次代に最高幹部まで上り詰め、裏も表も知り尽くした絹坂にそんなことを言う意味などありはしない。
「あー。いや、まぁ、それほど、違くはないが、しかし、意味のない組織ではなかったのだぞ？　我々がいたからこそ、教諭陣は指導に熱が入り、仕事にやりがいを持ち、生徒会連中も自分で考えて行動し、困った奴らの相手をすることによって、社会の理不尽さの疑似体験をすることができ、そして、何よりも、組織に所属していた我々は、好き勝手なことをやりまくって、スリリングで刺激的で愉快な学生生活を送ることができたのだ」
「ものも言いようって、こーいうときに使うんですかー？」
「うむ」
脳天気なマヌケに見えて、中々わかっているではないか。
「今、先輩がやっている組織もそんな感じですかー？」
「いや、今のは違う。表立って、大学当局や自治会なんかに歯向かったりはしていない」
「じゃあ、何をやっているんですかー？」
「秘密だ」
それだけ言って、俺は外出することにした。秘密組織の会合に出席するためである。絹坂はぎゃーぎゃーと教えろ教えろと騒ぎながらついてきたものの、途中で拳骨を食らわせると、すごすごと帰っていった。

厄病女神と謎の組織の概要

かつて我が大学にはいくつか謎の組織があった。

一つは、誰が呼んだか青春倶楽部という糞恥ずかしい名前のサークルである。

大学のサークルの多くは真面目に文化活動に打ち込み、スポーツに汗を流し、同好の者と語らう集まりではあるが、しかし、中には少々趣を異にするものがある。例えば、ある政治主義や宗教に勧誘する目的を持っている組織などもあるにはあるが、それは、まぁ、さて置くとして、最も多いのは異性との出会い知り合い性春を謳歌しようという不健全にして不真面目極まりない目的を持つものである。この手のサークルとは中々に多く、建前は真面目ぶっていても実際の活動ときたら、親睦を深めるという名目のコンパばかりというサークルなど、どこの大学にも腐るほどある。いっそのこと腐ればいい。

この青春倶楽部の主目的も前述のような不真面目な活動であったのだが、この倶楽部が他者と一線を画するのは、ズバリ、この主目的を全面に押し出し、様々なイベントを企画したことである。当然至極不健全不真面目ということで、大学当局と大いに反目した。

さて、二つ目の組織とは、人間写真部という組織である。活動内容は人間を撮るだけである。一見、何も後ろめたいことなどないように思えるが、この組織も不健全不真面目極まりない。

この人間写真部の人間が撮影するのは所謂美人とか綺麗とかかわいいとか云われる娘っこやカッコいいとかハンサムとかイケメンとか云われる野郎である。彼らはそれら外見に恵まれた連中の写真を本人の許可も得ずに撮影し、その写真を影で売り飛ばすという肖像権をコケにするような非合法活動を繰り広げていた連中である。その盗撮活動は度々問題となり、やはり、大学当局に迫害された。

他には、代文屋という組織がある。昔、識字率が低かった頃に、

手紙や書類を代筆する職業の人がいたらしいが、それとは全くもって関係がないものの、少々似ている活動をしている連中である。

彼らが代わりに書くのは、普通の手紙や書類ではなく、多くの大学生の悩みであるレポートや論文である。これを彼らは様々な過去の論文やレポートをあちこちから切り取ったり編集したりして巧妙に独自のレポートや文章を作り出し、本人の筆跡を真似て書き上げるのである。勿論、有料である。

それと同じように恋文の代書も手がけており、彼らの作り出した恋文は一万ものカップルを作りあげたとかいう嘘だか本当だか分からない伝説が実しやかに語られているものである。当然、こちらも有料である。

学生の本分は勉学である。その大学生が自己で作成すべきレポートや論文を金の力で他人に作成依頼するなど言語道断である。当然、こちらも大学当局の弾圧を受ける。

この他にも、何の意味があるのか分からないが、無意味矢鱈滅多に大学の不正やらサークルの醜聞やら何やら、スキャンダルっぽい秘密を探り出そうと躍起になる目付会や、貧乏学生やサークルに低利で金を貸し付けてくれるが、様々な方法で債権を強引に回収してくる勘定所や冬は勿論春でも夏でも鍋会を主催して、通りがかりの人間に無理矢理鍋を食わせる鍋奉行所や学生たちのちょっとした苦情を受け付けて、ボランティア活動めいたことをしてみるハロー苦情とか、とにかく、よく分からない組織がたくさんあって、いずれも、まぁ、活動がどうにも学生相応しからぬとか不健全極まりない等の理由で大学当局から不遇を囲っていた。

これらの組織はいずれも大学当局から目を付けられており、度重なる規制や取締りにより活動は非常に困難になっていた。

そこで、彼らは団結し、結集し、組織化することによって、大学当局に対抗し、生き残りを図ったのだ。

こうして、誕生したのが、俺の所属する組織、通称「倶楽部」である。というのも、成立の経緯がいくつもの組織の合同であった為、

どいつもこいつもが自己の組織の名称に固執した結果、よくある合併した銀行のように「〇〇××△△銀行」とかになりかけたものの、合同した組織の数が大小合わせて一〇近かった為、その案は破棄され、結局、名称は「ナントカ倶楽部」にするということしか決まらず、とりあえず、名前に関する件は後回しにして、合同を行ったという。その後、名前を決める件は延々と先送りにされ、合同から二〇年ほど経った今も「倶楽部」のままなのである。

いい加減といえば、いい加減ではあり、学生の組織ゆえにルーズでてきとーなところおあるものの、二〇年といえば、下手に歴史がある為、長年の間に培われていった規則や受け継がれてきた慣習などがごちゃごちゃと定まっており、至極厄介極まりなかったりもする。

この倶楽部の肝心な活動目的はというと、これが実際よくわからない。なんとなく、なんにもやっていないような気もするし、何でもやっているような気もする。倶楽部内のそれぞれのグループや個人が勝手気ままに活動しているかと思えば、全体で行動するときもあり、結局のところ、何故、何のために、どうして、こんなヘンテコな組織があるのか俺含め組織に入っている連中もよくわからないのだ。ただ、なんとなく、面白そうだから、入ってみて、面白いと思った活動をしているに過ぎないのである。そのくせ、組織の決まりがどうたらこうたら慣習があーだこーだとのたまっているのだから、一体、俺たちは何をしたいんだろか？

さて、その倶楽部は元々が小組織の集まりであった為、その倶楽部の中にいくつかの部署が並立する形になっている。元々の小組織は倶楽部の中で重なる組織と合わせられたり改組されたりしていき、現在は大きく分けて七つの部署が存在する。

まず、かつての青春倶楽部の影響を強く残すグループがある。ここは更に面倒なことに、グループとしてはまとまっているのだが、グループをまとめて呼ぶ名前が存在しない。これまた、おそらく、設立時に云々したせいであろうが、便宜的にそこの責任者である幹

事長の所とか幹事とか呼ばれている。ここは、倶楽部内での行事を一手に行っている部署であり、年に何度もある旅行会や宴会などを企画運営している。また、何故か、かつての鍋奉行所がこの中に生き残っていて、たまに大学構内で鍋をやっている姿が見受けられる。

次に勝手方がある。ここは倶楽部の金勘定を司る部署であり、かつての勘定所のように金の貸付と取り立ても行っている。

公事方は組織内の規則を定めたり、秩序を維持する組織であり、あんまりにも羽目を外した奴にお灸を据えるのが仕事である。ただし、何故だかお節介なことに組織外の人間であっても秩序を乱しているとかお灸を据えないといけないと判断すると勝手にお仕置きしに行く正義の味方ぶった迷惑な連中である。

大目付はこれまた、正式なグループの名称がないのだが、基本的に責任者である大目付の名がグループ名の代わりのように使われている。活動は組織内の監査であるが、これまた、昔の組織の流れで、関係ないところの情報も収集しようとする癖がある。ちなみに、当代の大目付が俺である。

人間写真部と代文屋は前述したとおりの組織であり、今も脈々と倶楽部の中に生き延びている。

最後に雑務所があるが、これは、倶楽部内の他の部署がやらないざっぱ仕事を押し付けられているところである。

これが、我が倶楽部の実態である。

厄病女神と頭取会議

頭取会議は完全に行き詰まっていた。
俺含め倶楽部の各部署の責任者である頭取たちはむっつりとした顔で腕を組み踏ん反り返って座り込んでいた。
会議の場には七人の男女が席に着いていた。
大目付たる俺のすぐ左隣には、中肉中背の地味な印象の先輩が座っている。午前に電話をかけてきた公事方頭取の仁井見（にいみ）先輩だ。
「いやぁ、中々決まらないねぇ」
仁井見先輩はへらへら笑いながら言ってきた。
この先輩の根回しが下手糞だから、こんなふうに揉めているのではないか。と言いたくなるも、一応、一年先輩である相手にそんなことを言うわけにはいくまい。
「先輩の調整に少々難があったのでは？」
「それって、言い方は丁寧だけど、お前の根回しが下手糞だろってことだよね？」
言葉に含められた意味を上手く理解する読解力に優れた先輩のようだ。
「しかし、倶楽部の会議を準備調整するのは、公事方の掟御定奉行の仕事では？」
「今はこの事態の責任がどこにあるとかそういうことを議論している場合じゃないよ。それよりも、この事態をどう収拾するかということが問題さ」
ちょこざいな屁理屈を捏ねやがる。伊達に掟御定奉行（おきておさだめぶぎょう）を歴任していない。あの役職は口が達者じゃないと務まらんからな。
この事態というのは、つまりは、我が倶楽部を統率する今期の頭取首座を選出する為の頭取会議において、意見の対立から会議は混乱、紛糾し、いつまで経っても首座を選出できないでいた。
というのも、仁井見先輩が推す勝手（かって）方頭取中鹿先輩の首座就任に

他の頭取たちが強く反対したからである。では、他に候補がいるのかといえば、幹事長音沢が立候補したそうな顔をしていたものの、彼を推す者はなかったし、他の適当な候補はいなかった。にも関わらず、頭取たちが中鹿先輩の首座就任に反対する理由は、権力の分散にかかることである。

代文屋店主松宮は言った。

「中鹿先輩自身に問題があるわけではない。しかし、財政責任者たる勝手方頭取が全体の組織の長たる首座を務めることに問題があるのだ。つまり、組織全体の総指揮者が組織の金に関する権限までを握ることは、権力の集中が過ぎるのではないか？　現に、過去、勝手方出身の頭取二名はいずれも予算のバラマキや買収等による汚職に手を染めている。到底容認できることではない。また、その首座の暴走を抑え監視するはずの公事方頭取と大目付が推薦しているということも問題ではないか？」

黒髪おかっぱ頭で眼鏡をかけた一昔前の糞真面目学級委員長みたいな松宮はそんなことを無表情で淡々と述べ、他の頭取連も頷いたのである。眼鏡かけて洋服着た座敷童みたいな奴のくせに中々厳しいことを言いやがる。

まぁ、確かに、勝手方、公事方、大目付という財政責任者、規律管理者、監査担当者の三者がつるんでいりゃあ、その他の部署は警戒感を抱くのは仕方がないといえよう。この点は、勝手方頭取を推し、大目付に協力を求めた公事方頭取の責任だ。

こうして、我々は膠着状態に陥った。喉の渇きを覚えて、机の上に置かれたお茶のペットボトルを手にするが、呆気ないほど軽い。中身は空だった。見れば、全員のペットボトルの中身が空だ。

「こうして黙り込んでいても何にもなるまい。いい加減、さっさと決めようではないか」

かなり、イライラしてきた俺が発言するも、こんな感じの発言自体、既に全員が三回は口にしている。

「じゃあ、どうやって決めるっていうのよ？」

長い茶髪をポニーテールにした気だるげな人間写真部部長高賀野先輩が言った。この台詞も既に全員が三回は口にしている。
その言葉に、俺は何とも言えず黙り込むしかない。
そんなことを更に発言者を変えて三度繰り返した後、我々は小休止を挟むこととした。
「三十分後にここに再集合しよう」
仁井見先輩の言葉に全員が頷き、俺は会議を行っていた部屋を後にした。
その足で食堂へと向かった。そこには我が悪友が二人ほど待機していた。中肉中背の特徴のない野暮ったそうな男と鋭い目つきをした黒いショートカットの女だ。俺の古くからの友人の草田心平と薄村沙希だ。
「おーい。双葉ー」
草田が唐突に大声を上げて、俺を見て、手を振ってきたので、俺は黙って歩いて行って、そいつの頭を殴る。
「痛いっ！　何すんのさっ！？」
「やかましい。貴様がわけわからんことを言うからだ」
「何も変なこと言ってないじゃん。名前呼んだだけじゃ」
「黙れっ！　このすっとこどっこいっ！」
もう一発、いや、足りないと思い、数発殴って黙らせる。あんまり殴り過ぎたせいか、草田は頭を抑えて動かなくなった。
「相変わらず、自分の名前にコンプレックスがあるみたいですね。もう二〇年以上その名前でやってるでしょうに」
「シャラップ」
呆れ顔の薄村に俺はぴしゃりと言い放つ。
「で。どうでした？　頭取会議は？」
薄村の問いに俺は会議の模様を粗方話して聞かせてやった。こいつも倶楽部の一員なのだ。大目付配下ではあるが、今は勘定吟味役として勝手方に出向している。ちなみに草田は公用組番頭という役職にある。公用組は倶楽部の渉外部門であり、公用人をトップとす

る。俺はこの間までこの公用人という役職にあった。
「そうですか。決まりませんでしたか」
「今は小休止だ。これが終わったら、まーたあすこに缶詰だ。今日中に決まるかどうかもわからん」
「まぁ、しかし、執行三方がまとまっていれば、他の部署が反発するのも頷けるという話です。もっと事前に策を練ればよかったですね」
「仁井見先輩の根回しが遅いのが悪いのだ。少なくとも、一週間は前に言っておいてくれれば、こんなことにはならんかった」
「とはいえ、公事方は一昨日まで内紛が続いていましたから。御用奉行が仁井見頭取を降ろそうと画策して、公事方を真っ二つにしていましたから」
　我が倶楽部では、たまに、こーいうクーデター騒ぎや内乱、粛清なんかが、ちらほらと起こるのだ。とはいえ、それほど、血で血を洗うような暴力的な騒ぎではなく、大抵は内部の多数派工作とか部屋に閉じ込めて出れないようにするとか間抜けな様を晒した写真などで脅すとか結構くだらない感じの闘争である。
「結局、御用奉行派が敗れて、御用奉行の砂川は雑務所の広報奉行に左遷されたな。もう、あいつは雑務所に塩漬けだろう」
　雑務所は他の部署ではやらないてきとーな仕事を押し付けられる部署であり、その中の広報奉行とは名のとおり広報を担当している。しかし、うちの倶楽部は秘密組織を気取っているので、基本的に広報なぞするわけがないので、ただの閑職に過ぎない。
「とりあえず、腹が減ったので、腹ごしらえをしよう」
「しかし、休憩時間は半時ですよね？　食べてる時間ありますか？　注文して、できあがったのを取りに行って食べてる暇なんかないんじゃないですか？」
　それもそうだ。止むを得ない何かコーヒーでも飲んで、空腹を我慢しよう。
「あー。おにぎりを作ってきましたよー。これを食べてくださいー」

おぉ、なんとも気が利く奴だと思い、おにぎりを受け取りつつ、あぁ、またかと達観にも似た心持になる。
「貴様はまーた何でここにいるんだ？」
「先輩のいるところならば、どこにだって私は現れるのですー」
絹坂はにこにこと笑いながらストーカー宣言。まぁ、今更か。こいつは高校時代から、よくよく、俺の側にいつの間にか現れる奴なのだ。
「しかも、何で、都合よくこんなものを持っているんだ」
「先輩をストーじゃない、見守りながら、お腹減ったら食べようと思ってたんです。あ、私に遠慮しないでもいいですよー。私はお腹減ったら食堂で何か買って食べますからー」
「誰が貴様に遠慮なんぞしてやるか」
「それって、私たちは遠慮しなくてもいい関係ってことですかー？」
何だ。そのポジティブ思考は。気持ち悪いぞ。
しかめ面で絹坂を睨みながら、何はともあれ、腹は減っているので、おにぎりをもりもりと食う。具は梅か。
「美味しいですかー？」
「普通」
「普通って何ですかー」
絹坂の頬がぷくーっと膨らんだ。こいつは、ちょっと怒ると頬を膨らませるという漫画キャラみたいなことをするのだ。少し痛いので止めろと前から言っているのだが、効果はない。
「ただ、米に塩をまぶして梅を埋め込んだだけのおにぎりにそれほど味の違いが出るわけあるまい」
「先輩の意地悪ー」
「うるさいうるさい」
絹坂がぴーぴー言う横でさっさとおにぎりを腹に収納する。
と、ふと、悪友二名を見ると、なんだか、じと目で俺と絹坂を見ていた。何か言いたげだ。
「何だ。その目は」

「いや、なんつーか」
草田はもごもごと口ごもる。何だというのだ。じれったい奴だな。さっさと喋れ。
「彼女いいなーと思ってた」
「このタイミングでどうしてそんなことを思うのか俺には全く理解できん」
「一人身は寂しいなーってことですよ」
薄村がコーヒーにふーふーと息を吹きかけながら呟いた。なんだか、いつになくアンニュイだ。草田も深く頷いて同意する。一体、なんだというのだ。
「ところで、先輩ー。用事はまだ終わらないんですかー？」
「ん？　うむ。決めなければならぬことが未だに決まらんでな」
そろそろ、小休止の時間の終わる時刻である。まーた、あの沈黙の空間へ行ってむっつり黙っておらねばならん。
「えー。せっかくだから、一緒に買物とか行きたいなーって思ってたんですけどー」
「んなこと言われても、こっちの用が片付かん限り、貴様の用に付き合うことなどできん」
「もうそんなのあみだくじか何かで決めちゃえばいいじゃないですかー」
「そういうわけにはいかん。大事なことだからな」
「むーん」
絹坂はまーた頬を膨らませた。だから、それを止めろと。
「しかし、アレですねー。先輩にも思い通りにならないことがあるんですねー？」
じろりと絹坂を見ると、彼女はにひひと笑って見せた。
「私の中のイメージでは、先輩はなんでも自分の思い通りにしちゃう感じの人だったんですけどねー。或いは、思い通りにならないなら、全部引っくり返して止めちゃうかー」
どんなイメージだ。それじゃあ、俺がまるで、何でもかんでも自

分の思い通りにならないと嫌なワガママ野郎みたいじゃねえか。俺はそんなにも傍若無人な奴ではない。
そろそろ、小休止も終わる時刻となり、俺は会議の場へ戻った。
そして、一〇分で戻ってきた。
「早かったなぁ。もう決まったのかよ？」
「まぁな」
驚く草田の問いかけに応じつつ、食堂の椅子に腰掛ける。
「一体どうやったのですか？　聞いたところによると対立は根深そうだったんですが」
「む？　いや、ただ、あと一〇分で決まらないなら、俺は帰ると言ってやった」
帰りたいのは全員が同じ気持ちだった。ただ、そういうわけにはいかんので、渋々と残ってやっていたのだが、俺の帰る宣言により、全員の帰りたい意識が急速に高まった結果、勝手方頭取中鹿先輩の首座就任に反対していた連中も態度を軟化させた。そこで、俺は、大目付が責任を持って首座の事務を監査し、定例の頭取会議で全て公表すると確約し、両者はそこで手打ちとなり、晴れて解散となったわけだ。誰もこの春の良い天気の日に屋内で何も決まらない非生産的な会議に時間を費やしたいと思わないからな。
「さすが、先輩ー。やっぱり、きちんと思い通りに物事を進めてしまうんですねー」
俺がコーヒーを啜っていると、横から絹坂が能天気な笑顔で話しかけてきた。
「じゃあ、早速、お出かけしましょうよー」
「何でじゃ」
「さっき、終わったら、一緒に買物に行きましょうって言ったじゃないですかー。さぁさぁ、行きましょうよー」
そう言って絹坂は俺を強引に引っ張り出した。ええいっ！　俺はゆっくりコーヒーも飲めんのか。
草田が恨めしそうに、薄村が馬鹿にしたような顔で、俺を見送っ

た。何だ。その態度は。
「ほらほらー。行きましょうよー」
そのまま、俺は絹坂の買物に付き合わされたのだった。忌々しいことだ。

厄病女神とうわばみと眼鏡

「後輩ー。後輩ー。一緒に酒を飲もうぜー」
俺が顔を洗っていると、聞き慣れた大声が無遠慮にも俺の耳の中に飛び込んできて、鼓膜を損傷させんばかりに震わせた。
一瞬、何事かと思ったものの、一秒後には何事か理解したので、心を落ち着け、洗顔を継続した。
「あらー。女の子がいるわー」
「あー。お久しぶりですー」
「誰？　このちっこい娘っこ」
洗顔を続ける俺の耳に聞き慣れたでかい声と絹坂の声と少し聞いたことがある声が飛び込んでくる。全部女の声だ。いつからここは女の巣窟と化したのだ。
「冴上はー？」
「先輩なら、そこで顔洗ってますよー」
でかい声の問いかけに絹坂は素直に応じ、俺の居場所を密告する。こいつ、俺のいうことなんぞちっとも聞かないくせに、どーしてこういうときだけ、素直ぶるんだ。
どかどかと無遠慮な足音が近づいてきたので、顔に水をかける作業を終え、顔を上げる。
「よおっ！　一緒に酒盛りしよーぜー」
にかにかと太陽のように輝く笑顔でそう叫んだのは、セミロングの黒髪に、きらきら輝く大きな瞳を持ち、一七〇ｃｍ少しという長身で、とても立派なスタイルを誇る先輩である。彼女のことを俺はもう嫌なくらいよく知っている。俺が大学通学中の住処と定めている木暮荘の大家であるところの木暮二十日先輩である。
俺の遠い親戚だか知人だか何だかに当たるらしく、俺をかなりの割安で木暮荘に住まわせて頂いている。つまり、かなり世話になっている人ではある。が、ここは言わせてもらおう。

「はぁ？　あんた、何言ってんだ？」
「おぉぉいっ！　ちょいちょいちょーい！」
何だこの反応。何で、顎出してるんだ？　この人。
「え？　わかんない？　ちょっと前にちょっと流行ったネタなんだけど」
「何のネタですか？」
「あの、なんていうか、あー、なんとかっていうお笑いコンビがね」
暫くそのネタの解説を聞いたがどんなに詳しく説明されても「あぁ、そう」以上の反応をすることはできず、俺は、ただ、早く顔を拭かせてくれと思っていた。
「で、結局、何しに来たんですか？」
「だーかーらー、酒飲もうってー」
「はぁ？　何でですか？」
「酒を飲むのに理由なぞいらん！」
そう宣言する二十日先輩の口からは激しく酒の臭いがした。まぁ、このザルとかうわばみとかミス酒豪とか云われる二十日先輩から酒の臭いがしないことはないというほど、この人は呆れるほど酒が大好きなのだ。いつか肝臓かどっかを痛めて死ぬと思う。
「まぁ、酒を飲むのに理由はいらないっちゃあいらんのは分かりますがね。しかし、今からですか？」
「今から！　ここで！　今すぐ！」
二十日先輩は酔っ払い特有のハイテンションで叫び、大笑いする。
しかし、そんなことを言われても困る。大学は春休み期間中ゆえ、講義等があるわけではないし、本日は特に予定や用事があるわけでもない。だが、しかし、しかしなぁ。
「こんな朝っぱらからですか？　今、八時少し過ぎなんですが」
「歓迎ぱーてーだよ。歓迎ぱーてー」
ぱーてーって何だ？　あぁ、パーティーのことか。てか、何のぱーてーだって？　歓迎？　何をだ？　新学期をか？
「お絹ちゃんの歓迎ぱーてーに決まってるじゃん」

何だって、絹坂が俺の部屋に寄生しに来たことを歓迎しなきゃならんのだ。それに、絹坂が俺の部屋にいるのは、奴の部屋の都合がまでの暫定的な措置だぞ。去年の夏休み中にいた期間よりもはるかに短く、あと数日もすれば、いなくなるという奴の歓迎なんぞを何故にしなければならんのか。

とは思うものの、どうせ、二十日先輩の思惑は、ただ単に飲む口実が欲しいだけなのだろう。

そもそも、先ほど「久しぶり」と挨拶していたところから見て、二人が顔を合わせるのは夏休み以来なのだろう。そのことから考えても歓迎ぱーてーとやらが口から出任せであるのは一目瞭然である。

「嫌ですよ。面倒くさい」

「ほー。嫌かい」

俺の言葉に二十日先輩はじと目で俺を睨む。そんな目で見てもダメだ。

「嫌ですとも」

きっぱりと断ってやる。先輩なぞの圧力に屈する柄ではないのだ。年上への敬意は社会的常識として当然ではあるが、不当な命令や指示、圧力なんぞに屈する必要は全くもってないのである。

大体、俺は先週まで連日怒涛の飲み会ラッシュで、飲んで吐いて寝て飲んで吐いて寝てを繰り返していたのだ。もう暫くの間、酒は見るのも嫌だという気分になのである。いくら、世話になっている先輩の要請とはいえ、酒はもうこりごりなのだ。

二十日先輩は暫く俺をじとーっと睨んでいたが、やがて、口を開いた。

「……君、来月から家賃二倍ね」

「絹坂ぁっ！　さっさと酒とつまみを用意せんかっ！」

「先輩……」

何だ。その何か言いたげな呆れ顔は。何で、私、この人のこと好きなんだろうとか疑問に思ってるような顔だぞ。そんなことはどーでもいいから、さっさと歓迎ぱーてーの準備をするのだ。

「いやー。うちの後輩は話が分かる奴で助かるなー」
おのれ。俺の弱味につけこみやがって。なんと卑劣な。鬼だ。悪魔だ。
酒とつまみの用意を絹坂に押し付けて、俺は茶の間に戻った。テーブルには既に二十日先輩ともう一人が席に着いていた。その一人というのは先輩に連れられてきた先輩ほどではないが、やはり背の高い女で、長い茶髪で眼鏡をかけている。彼女も木暮荘の住人で、二十日先輩と同学年であり、友人であるそうだ。木暮荘で日常的に飲酒を嗜むのは二十日先輩を除けば俺と彼女しかいない為、俺同様よく二十日先輩の酒に付き合わされる身である。
俺自身とはあまり付き合いはなく、ただただ二十日先輩と飲むときに、たまに居合わせるだけの間柄だ。その為、飲みの場では結構喋るのだが、あまり良く知らなかったりする。二十日先輩が彼女のことを眼鏡と呼んでいるので、俺はなんとなく、眼鏡先輩と呼んでいたりする。
「冴上君。あの娘っこは誰なのさ？」
その眼鏡先輩は絹坂を指差した。
眼鏡先輩は去年の夏休みの間、自分探しの旅と称して軽自動車で日本一周を企んだ為、木暮荘におらず、よって、絹坂とは今日は初対面なのだ。
「アレはうちに寄生する厄病女神です」
「何ソレ？　厄病神？」
「女なので厄病女神ですな」
「ふーん」
眼鏡先輩は分かったような分からないような感じに頷くと、ちょうど、冷蔵庫に入っていた缶ビールを持ってきた絹坂に声をかけた。
「ねぇ。君、名前は？」
「絹坂衣ですー」
あぁ、こいつは衣って名前だったか。コロンボかコロンブスに似ているはずだと思っていたが、遠からずであったか。というか、ほ

ぼ正解と言って良いに違いない。違うところといえば刑事でも航海士でもないことくらいじゃあないか。
「君、冴上君の彼女？」
二十日先輩が早速缶ビールを開けた横で、眼鏡先輩がのんきに尋ねた。
当然、俺は不機嫌に顔をしかめる羽目になる。
「そうですー」
そして、当然の如く絹坂はにこにこ笑いながら肯定するわけだ。
俺は殊更不機嫌そうな顔をして、缶ビールのプルタブを開けた。
最近、このプルタグを開け過ぎているせいか指にタコができている。
クソッタレ。

厄病女神と木暮荘二階の人々

「おつまみですー」
そう言って厄病女神が差し出してきたのは、ちくわともやしとピーマンとエリンギをなんかてきとうに炒めて塩胡椒と醤油で味付けたものだった。まぁ、食えなくはない。それから、ジャガイモを薄切りにしてコンソメスープで煮込んでスライスチーズを載せた料理を出してきた。まぁ、普通に不味くない。あと、スルメがでてきた。
「先輩ー。もうこれ以上、出せませんよー」
「え。お絹ちゃんの料理レパートリー、これだけ？」
絹坂の言葉を聞いて二十日先輩が驚き半分呆れ半分の声を上げた。
これを聞いて厄病女神は激昂した。
「失敬なーっ！　私の料理のレパートリーはこんなもんじゃないですよーっ！　今、これだけしか出せないのは、冷蔵庫にこれくらいしか入ってなかったからですーっ！」
そうして頬を膨らませてぷりぷりする。だから、その頬を膨らませるの止めろ。ちょっと痛いから。
「じゃあ、まぁ、いいか」
二十日先輩は諦めてしょぼい簡単料理をつまんで、缶ビールを飲み干した。
「双葉ー」
「その名で呼ぶな」
「ビールおかわり」
「もうありませんよ」
「な、なんだってーっ！」
二十日先輩は目と口と鼻孔をおっぴろげて叫んだ。女がしていい顔ではなかった。
「もうないのっ！」
「あんたがガバガバ飲むからでしょ」

二十日先輩の悲鳴に、眼鏡先輩が呆れ顔でツッコミを入れた。
「信じられないっ！　まだ始めて三〇分も経ってないのにっ！」
まぁ、元々大した数あったわけではないからな。常時部屋に缶ビールを何ダースも備蓄しておくほど俺はアルコール漬けではないのだ。
「あんびりーばぼーっ！」
「先輩。やかましい」
「ムキーッ！　やかましいって何だよっ！　そんなこと言うなよっ！　酒がなかったらダメなんだよーっ！　まだ三〇分経ってないじゃーんっ！」
先輩はぎゃーぎゃーぎゃーぎゃーと騒ぎまくった。手足をじたばたさせて大騒ぎだ。手足が無駄に長いので、かなり迷惑だ。眼鏡先輩も顔をしかめて不機嫌そうに二十日先輩を睨んでいる。眼鏡先輩も二十日先輩の酒乱に付き合わされて正直迷惑なのだろう。
二十日先輩は少々の酒でもすぐに酔っ払ってこのように大暴れ大騒ぎをして、周囲に大変な迷惑をかけるのだが、そのくせ、寝ないし、吐かないし、具合悪くもならず、ひたすら酒を鯨飲していくので、付き合わされる方は面倒くさいこと極まりない。
「どっか一人で飲みに行けば？」
「こんな時間じゃあどこも開いてないよっ！」
眼鏡先輩が突っぱねるように言ったが、二十日先輩が言い返す。
まぁ、そりゃあ、まだ朝の九時くらいだからな。こんな時間から酒を出している店も多くはあるまい。そもそも、この酔っ払いを受け入れてくれる店があるかどうか。
「双葉ー」
「その名で呼ぶな」
「お酒買ってきてー」
言うと思った。そこまでして酒が飲みたいか。
「嫌ですよ」
「何でさ！？」

面倒くさいからな。とはいえ、そう言っても小暮先輩は引きはしまい。
「そもそも、朝っぱらから飲もうっていうこと自体が間違っているんです。大人しく、部屋に引き篭もって本を読むなり、テレビ見るなりしてましょうよ」
「いーやーだーもーんっ！」
先輩はまたじたばた。埃が舞うから止めて欲しいな。下の階にも迷惑かかるだろうし。下は誰だったかな？　確か後輩女子だ。後輩だから良いか。
「んなガキ臭いこと言ってないで、さっさと部屋に戻ったらどうですか？　さっさと帰れ」
「帰れだとーっ！」
おっと、本音が口から漏れ出たようだ。
二十日先輩は俺を掴まえてガクガク揺さぶったり大声で叫んだり騒いだりしたが、俺はその暴挙にひたすら耐え続けた。しばらく我慢していれば少し酔いが醒めて飽きて帰るだろう。酔っ払った二十日先輩を沈静化させるには、酒を与えず、なだめすかして、酔いが醒めるのを待つのが一番だ。
そんなわけで、俺は先輩の言葉をあんまり相手にせず、てきとーなことを言ったり言わなかったりしていた。俺の経験上酔っ払いの言うことはあんまりというか殆ど相手にしなくてもいい。大抵の酔っ払いは次の日には自分が何を言って何をやっていたのかすっかり忘れているか殆どうろ覚えだし、覚えていたとしても、自分が酔っ払ってわけわからん言動をしていたことを自覚しているからだ。ただ、相手にしないと怒り出したりとんでもない言動に出る酔っ払いも出るので注意が必要である。故に、ほどほどてきとうに付き合うことが望ましい。
二十日先輩はしばらく俺に絡んだものの、中々釣れないので、標的を変えることにしたようだ。
「お絹ちゃーん。お酒買ってきてー」

未成年に酒を買って来いとか言うなよ。
「いいですよー」
「そして、お前もお気楽にＯＫするんじゃないっ！」
「えー。だって、お世話になる人のお願いですしー。お金さえ出してくれれば買物くらいー」
「ちゃんとお金出すよー。えーと、ビールと焼酎とワインとー、あと、おつまみかなー。一万あれば足りると思うな」
絹坂の言葉に喜んだ二十日先輩はいそいそと財布から一万円札を取り出し、絹坂に渡した。
「ダメですよ。奴はまだ未成年だし、そもそも、見た目、高校一年生っつっても通じるガキなんですから」
「別にお絹ちゃんが飲むわけじゃないからいいじゃん」
二十日先輩はぶーたれた顔でほざいた。
「いいとか悪いとかじゃなくて、あんた、コンビニのレジとかで見たことないですか？　未成年に酒類、たばこ類はお売りできませんとか。年齢確認をしますとか」
「だいじょぶだいじょぶ。んなもん、真面目にやってる店なんかないから」
それは全然大丈夫なことじゃないんだがな。道義的にも法律的にも。酒・煙草なんて若い頃からやっても何もいいことないと思うがな。とはいえ、酒も煙草もやっている俺が言ってもしょうがないがな。
「それに、お絹ちゃん、もう行っちゃったし」
確かに、絹坂の姿はもうない。奴め。普段は行動がのろのろなくせに、余計なときだけ妙に行動が迅速なのだから腹が立つ。
「ほんじゃ、双葉はさ」
「だから、その名で呼ぶなっつの」
「他の皆集めてきて」
他の皆っつと誰々のことだ？
「うちのアパートの皆さ」

「何でですか？」
何で、俺の部屋にアパートの住人を大集合させにゃあかんのだ。まぁ、こういう酒好きで騒ぐのが好きな御仁が大家をやっている故、住人たちで集めって何やかんややることはたまにはあるものの、何故、今、俺の部屋に大集合させんとならんのか。
「お絹ちゃんの歓迎ぱーてーって言ったじゃーん」
それ、まだ覚えていたのか。二十日先輩が、ただ、酒を飲みたいが為にでっちあげたてきとーな口から出任せだと思っていたのだが、中々どうしてその設定をよくも忘れずにいたものだ。そのくせ、その歓迎すべき相手を買物に行かせている辺りはどうなのだろうか。
「だーかーらー。皆で集まってお絹ちゃんを歓迎してやんだよー。ねぇ、眼鏡。いいと思わない？」
「んー？　まぁ、いいんじゃない？」
二十日先輩に話を振られた眼鏡先輩はワイドショーを眺めながらてきとーに頷いた。面倒くさいからってあんまりてきとーに二十日先輩の言動に賛同したりしない方がいいと思うのだがな。
「てなわけで、あんた、皆集めてきて」
「結局本気でやるんですか」
「今更ぐだぐだ言うなやー。ほら、行って来い！」
二十日先輩に追い出されるようにして、俺は部屋を出た。全く億劫極まりないな。
とはいえ、これ以上、余計に逆らったところで、二十日先輩は翻意しそうにないし、下手に機嫌を損ねて家賃を値上げされても困る。ここは大人しく付き合うこととしよう。久々の朝から朝までコースを覚悟せねばならんな。
とりあえず、手近な隣室のダメ漫画家柚子川誠に声をかけた。
「絹ちゃんの歓迎会？　行く行くー」
柚子は簡単にＯＫして、相変わらずのゴミ溜めみたいな部屋を出た。
「誘っておいて何だが、貴様、漫画の締め切りは大丈夫なのか？」

「うーん？　商業のは大丈夫」
「商業のってどーいう意味だ？」
柚子の言葉の中でイマイチ意味が理解できない言葉があったので尋ねる。
「あぁ、君らが普通に読むような漫画のことさ。それは商業。で、個人的にコミケとかに出す奴は同人ね。こっちの同人誌はさー。春のイベントに向けて書いているんだけど、もう殆どアウト近いわー。印刷所の締め切りまで数えるしかないもーん。うふふー」
「じゃあ、宴会なんぞに参加している場合ではないのでは？」
「それはそれ。これはこれだよ。たまには気分転換しないとー。ＮＴＲモノだから書いててちょっとイヤーな気分になってくるしー」
ＮＴＲモノって何だ？
疑問に思い、質問したが「君は知らない方がいい。というか、知ってもしょうもないよー」と言われたので、気にしないことにした。どーせ、下らんオタク用語であろう。
「ところで、貴様の隣の横島先輩は未だに帰ってきてないんだったけか？」
「うん。そうだよー。まだ帰ってきてない」
俺と柚子は揃って二階の三号室を見つめる。この部屋の住人である横島先輩は二十日先輩よりも年上で、二十日先輩が木暮荘の大家に納まる前から住んでいた人物で、大学に入学して七年だか八年だかしているらしいのだが、ここ最近、姿を消しているのだ。噂によると富士の樹海へ行くとか北陸の断崖絶壁へ行くとか周囲に漏らしていたらしいのだが、大丈夫だろうか。少々気になる。
その向こうの二階の二号室は空室なので、素通りする。
さて、この先の二階の一号室には俺の一年後輩である清原零太郎という男が住んでいる。彼は何故だか俺に妙に懐いていて、よく話をする。
ところで、清原という名を聞いて日本人が思い浮かべるのは西武や巨人にいた某プロ野球選手のことであろう。

しかし、日本には古来より由緒正しい清原という性が存在する。
その始まりは舎人親王（とねりしんのう）の孫小倉王・貞代王から始まり、かの三十六歌仙にも名を連ねる清原深養父（きよはらのふかやぶ）や清少納言の父である清原元輔（きよはらのもとすけ）などを輩出した学問の家柄の清原家である。
我が後輩たる清原零太郎も、その学問の家柄の血を受け継いでいるらしい。
直系とは離れに離れ、分家を名乗るのもおこがましいほど傍系の家ではあるが、一応、その学識の家の血が彼にも流れているという話なのだ。
彼の祖父は密かに有名な歴史小説家であり、また、父はその筋では有名な国語学者であった。彼の一族は未だもって学問とかなり近い場所で活動しているのだ。
殆どの一般人が知らないようなマイナー貴族とはいえ、その血脈と名字に彼は一抹（いちまつ）の誇りを持っている。
だが、しかし、彼は己の名字には誇りを持っているが、下の名には甚だ不満であるらしい。
何故、学識ある家に生まれた自分の名が、零点の零が付いた零太郎であるのか甚だ疑問というよりもあからさまな不満を持っていた。
「何故に、俺の名前が零点太郎なのだ？」
零点太郎などという不躾（ぶしつけ）な呼び名で彼のことを言い表す者は彼以外にはいなかったが、彼は一人よく文句を言っていた。
聞くに、彼の父曰く、「零は無であり、最初から無の状況に立ち、物事を考えられる男になって欲しかった」云々という理由で「零太郎」と彼を名付けたらしいが、そんなことは彼にとっては関係ないようであった。
「百太郎。いや、九十太郎であれば、まだ良かったのに」
と、彼は意味不明なことを言っていた。百太郎はまだしも九十太郎は如何なものであろうかと俺は思う。そんな名前よりも遥かに零太郎の方がマシであると断言してやったが、彼はそれでも不満そうであった。とにかく、彼は零という字が気に食わないらしい。

前述したような己の名前に対する妙な拘りで分かるとおり、清原零太郎は奇特な男である。
そもそも、彼は勉学が好きという奇妙奇天烈（きみょうきてれつ）極まり、万民に理解しがたい性質を持っている。
彼が小説家の孫。学者の子に生まれたから、勉学に励み、祖父親に褒められようとして勉学をしているわけでもない。
ただ、純粋に勉学に努めることが楽しいらしいのだ。特に数学が。変態としか言いようがない。
更に彼は何故か妙な正義感を持ち合わせており、バスや電車に乗れば老人子供に席を譲り、落とし物を見つければ辺りの人に声を掛け、落とし主が見つからなければわざわざ交番に持って行くような男であった。
そんな正義に溢れた男であるところの彼が何故俺なぞに懐いて、よく話を聞きに来たり、相談を持ちかけてきたり、雑談したりしたがるのかはイマイチ理解に苦しむ。
今更言うまでもないが、俺は高校時代にはさる秘密組織のトップに君臨し、学校や生徒会を体制側と呼び、それに対して色々とイチャモンをつけては、悪行の限りを尽くすという開校以来五本の指に入ると言われる大悪人である上に、今でも謎の組織の大幹部の一人として活動するような輩である。
何故に、正義を信望する彼が悪の権化と称しても差し支えないような俺を尊び敬うかは俺のみならず、彼を知る人々の多くが抱く疑問とされるところであり、その理由は聞くところによると諸説存在する。
例えば、彼は体制側から送り込まれた刺客で、実は俺の命を狙っているのだとか。
バリバリ硬派に見えて、実は男が好きな性癖で、俺の貞操を狙っているのだとか。
もしくは、秀才に見えるが、実は飛びっきりの阿呆で、思考がおかしいのだとか。

或いは、それ全てであると言われもしたが、もし、そうであったら、俺は清原との関係を大いに見直す必要性に駆られるが、今のところ、俺にとって彼は中々親しい後輩の一人に過ぎない。
その清原零太郎の部屋へ行くと、彼は朝早くから何やら非常に難しい数学の問題集を解いていた。
「貴様は休日の朝早くから一体何をやっておるのだ？」
「ある有名な数学者に問題をやっているのです」
何故、そんなことをしなければならないのか意味が分からない。
「頭おかしいんじゃないか？」
「おかしいことなんてありませんよ。前々から述べておりますが、数学はとても楽しい学問ですよ。これは」
「黙れ。それ以上、貴様の数学講釈を聞くつもりはないぞ。耳が腐るわ。俺は大学受験が終わったその日から数学なんぞとは縁を切っているんだ。足し算引き算掛け算割り算と小数点と分数の計算が分かれば事足りるわ」
「いえいえ、関数とか方程式を日常生活に利用すれば、」
「やかましい。黙っとれ」
清原は不承不承ながらも言われたとおり黙り込んだ。この点、どこぞの厄介な後輩よりもずっと扱い易い。
「まぁ、良い。貴様が休みに何をしようがそりゃ貴様の勝手だ。が、少々、その勝手を邪魔することになる」
「どういうことですか？　というか、先輩。お酒の臭いがしますが」
清原は顔をしかめた。ふむ。缶ビール二缶くらいでもやはり酒の臭いはするものか。
「まさか、朝から飲んでいるんですか？　あまり感心しませんね」
「貴様が感心するか感心しないかなぞどーでもいい話だ。問題は、この飲み会が二十日先輩主催による全員参加の行事だということだ」
俺の言葉を聞いて清原は呆れめたように溜息を吐き、数学の問題集を閉じた。
「なるほど。分かりました。参加しなければ厄介なことになるとい

うことですね」
二十日先輩に抗うことは無理だということは木暮荘に住人全員の共通認識なのだ。
「うむ。すまんな」
「いえ、先輩のせいではないですから」
こうして、木暮荘二階に住まう仲間二人を俺の部屋に送り出し、俺は一階へ向かった。

厄病女神と木暮荘一階の人々

二十日先輩が朝っぱらから酒を飲みたいが為に、嘘も方便とばかりに言い出した厄病女神の歓迎パーティーとやらをするべく、俺と肝心の主賓であるはずの厄病女神はその準備に駆り出されていた。

厄病女神は追加の酒とつまみ類を買うべく近所のスーパーだかコンビニだかに向かった。あいつ、未成年だが酒を買うことはできるのだろうか？　法律を杓子定規に捉えれば無理なはずなんだが、世の中結構てきとーだからなぁ。うっかり買えてしまいそうだ。

一方、俺の方はというと、歓迎パーティーをやるにあたって木暮荘中の住人を俺の部屋に集合させるべく、掻き集めることを指示された。

大家による家賃上昇という圧力に屈した俺は手近な二階の部屋を一つずつ当たっていき、ヘボ漫画家柚子川誠と変な後輩清原零太郎を呼び出すことに成功したのだった。

で、次は一階だ。

俺が居住している木暮荘は、別に入居者に男女の別について区別しているわけではないが、どういうわけだか、二階は男。一階は女という住み分けになっている。防犯上の観点から見れば逆にすべきだと強く思うのだが、居住者の部屋を決めているのが、あの酒を飲むしか能のない二十日先輩なのだから、そんな配慮を求めるのは無駄というものだ。

どうせなら、入居者を女子限定のアパートにしてしまえばいいのはなかろうか。大学も近いし、大家も管理人も女子学生という特色もあって、結構高い家賃でも入居者が集まるのではなかろうか。かなりいい商売になりそうだが、それを助言すると俺が追い出される羽目になるので、黙っていよう。

一階の一号室には大家の二十日先輩が居住している為、ここはスルーする。

その隣の二号室はいくらか前までは物置として使われていたが、新たに京島都が転居してきている。大家の隣に部屋を宛がわれているのは二十日先輩に代わって管理人を務めているからである。木暮荘の管理業務について大家のすぐ隣にいた方が便利なのだろう。

京島都は諸般の事情により、金銭的に非常に苦しい生活を強いられている苦学生である。奨学金を受けたり親戚から援助を受けたり色々しているようだが、それでも生活は苦しい為、彼女はせっせとアルバイトに励んでいるという。休日はもとより平日でも休まずバイトをやっている。俺の部屋に新聞を届けているのは彼女であり、時折、注文するピザを配達するのも彼女であり、近所のコンビニでレジを打っているのも彼女である。時折、商店街でビラやティッシュを配っていたりもする。大学の研究室の怪しげな研究の実験体になったりもしているようだ（大学の研究室では、よくわけのわからん研究の為にバイトを雇って色々させたりしているのだ。大抵、人間の心理とか人体の反応を探るものなのだが、これが、まぁ、大したことのない作業でも中々な賃金を払ってくれる）。

つまり、彼女は非常に多忙である。ましてや、今は春休み中である。連休ともなれば、何かまとまったバイトを入れている可能性もある。何もない部屋に一日缶詰にされて行動や心理、体内環境を分析されるなんて実験に付き合っている可能性も否定できない。

在室しているかかなり疑問ではあったが、とりあえず、確認することにした。

チャイムを鳴らすと、暫くしてドアが開き、京島が顔を出した。小豆色の古臭いジャージを着ている。

「はい、え？　あ！　お、おはよう！」

京島は俺を見て驚いたようでちょっとばかし上ずった声で朝の挨拶をした。

「チェーンも付けずにすぐにドアを開けるのは防犯上宜しくないぞ」

木暮荘にはインターフォンが備え付けられていない為、来訪者を確認するにはドアについてる覗き穴から外を覗き見るかドアを開け

て来訪者に応対するしかないのだが、後者を選択する場合にはドアチェーンをしておくことを強く推奨する。乱暴や強盗目的の良からぬ者が部屋に入り込むのをいくらかでも阻み、助けを呼んだり、窓などから外へ脱出する時間を稼ぐことができるわけだ。

「あ、うん、そうだな」

京島は素直にコクンと頷いた。

「それで、えーと、何の用、じゃない。あー、な、何か私に用？」

少し言葉遣いに苦慮しているようだ。つまるところ、何しに来たのかという意味だろう。それをいくらか柔らかい表現で聞こうとしているようだ。というのも、俺がいきなり京島の部屋にやって来たことは今までないからである。家賃を払いに来るくらいだ。木暮荘はなんとも古臭いことに未だに月末に現金持参という家賃支払方法なのだ。

それ以外の目的で俺が京島の部屋を訪れたことはないわけである。京島が一体何事かと思うのも無理はない。

「京島、今、暇か？」

「え？」

俺の問いに京島はぽかんとした。なんだか反応が鈍いぞ。

「いや、君は色々と忙しそうだからな。今は自宅にいるようだが、この後、バイトとかあるのか？」

「あ、えっと、今日は、休みの日だ。今は、内職してた」

「内職……」

「シール貼りの内職なんだ。えっと、ほら、お菓子とかの箱に原材料とか書いてあるシールがあるだろ？　アレを貼るんだ」

相変わらず涙ぐましい生活を送っているな。実家から勝手に持ち出した金がある故に、そこそこのバイトだけでも、そこそこな生活を送れている俺には耳の痛い話だ。

「あー。それでは忙しそうだな」

「え」

「いや、大した用事ではないのだ」

「あ。えっと、一体、何なんだ？」
「いや、いいんだ。ただ、俺の部屋に来られないかと」
「行く」
京島は即答してから、自分の服装を見て、慌てて言い足す。
「すぐに行く。ちょ、ちょっと準備してから行く」
「いや、無理しなくてもいいんだぞ？」
「大丈夫だ。この内職も納期はまだ少し余裕があるから」
珍しくも気遣いをするも、京島はどうあっても俺の部屋で開催される厄病女神なんぞの歓迎会に参加したいらしい。どうして、そんなもんに参加したいのか甚だ不明であるが、しかし、彼女がそこまで参加を表明するのであれば、それを拒む理由など俺にはない。
「じゃあ、俺の部屋に行っていてくれ。俺はまだ用があるからな」
「分かった。着替えたら、すぐ行く」
そう言って京島は部屋へ戻った。
何だろう。何か、ボタンの掛け違いみたいなことをしたような気がする。
それはともかくとして、さっさと他の部屋へ行く。じりじりと照りつける太陽が辛いからな。日がな家の中に引き篭もっていることが多い俺は太陽に弱いのだ。眩しいっつの。もっと雲出ろよ。
一階の三号室は眼鏡先輩の部屋であり、四号室は空室である為、スルー。
木暮荘には二部屋も空室があることになるのだが、これは、大家の二十日先輩が積極的に入居者を募集していないからだ。知り合いとか気に入った奴とかで部屋に困っている奴を木暮荘に入れているからだ。まったくもって商売気のない奴だ。とはいえ、この春からこの二つの空室に新入生を入れる予定であるらしいとは聞いたことがある。やっとこさ満室になるのか。
さて、最後の一階五号室は俺の真下であるが、ここには後輩の女子が入っている。それほど仲は悪くないが、それほど関わりがあるわけでもない。そんな相手に、いきなり、俺の部屋で厄病女神の歓

迎会をやるから来いなどと言うのはどうにも気が引けるものだ。男の後輩相手ならば、なんとでも言えそうな気がするが、年下の女子相手だとなんだかなぁ。かといって、木暮荘全室の入居者に声を掛けているのに、一室だけに声を掛けないのは非常に陰湿ないじめみたいでいかんな。

などとつらつら考えながらチャイムを鳴らした。

「はーい。あ、先輩。どーも、おはようございます」

五号室の住人である後輩もこれまたチェーンをしていない。木暮荘の防犯意識は全体的に低いようだ。全くなっとらんことだ。犯罪統計上凶悪犯の件数は増加しているわけではなく、概ね横ばい若しくは犯罪によっては減少しているとはいえ、しかし、犯罪に遭遇しないと確実にいえる世の中ではないのだ。防犯を心掛けることは決して無駄なことではない。

「あー。おはよう。うむ」

などと考えつつ、挨拶を返してから、はたと思い至る。この後輩の名前は何だったかなぁ？

真っ黒いショートヘアに高い鼻に少し細めの目で利発そうな顔立ちをしている。身長は普通くらいでスリムな体型である。

うぅむ。外見を観察しても思い出せぬ。

「えーと、何か御用ですかぁ？」

後輩はニコニコと笑いながら首を傾げる。ちょっと傾げすぎて体も斜めっている。

名前を思い出せぬからといって沈黙を続けても意味はない。名前の件は後回しにしよう。

「あーっとだな。朝っぱらからで申し訳ないのだが、俺の部屋で、あー、何だ。なんか飲み会をやると二十日先輩がほざいておってな。それで、全員集めろとの指示を賜り、こうして全室を回っているわけなんだが、あー、どうしても参加できないというのであれば、不参加でも良いと思うが、どうかね？」

「相模も参加していいんですか？」

あぁ、そうだった。この娘は一人称が名字なんだった。やっとこさ名前を思い出せて、なんだかスッキリだ。

「是非、参加させて頂きます」

相模は愛想よくニコニコと笑いながら参加を希望した。あんな酒乱と飲んでもいいことなんて何もないとは思うのだが、不参加を告げるとまたぞろ暴れ出しそうな気もするので、全員が参加するというのはひとまずは良いことだ。ということにしておこう。

厄病女神歓迎会

「えー。本日はお日柄も宜しくー」
確かに、天気は悪くないな。忌々しいくらい太陽が輝いておる。俺は晴天が嫌いなのだ。眩しいし、暑いからな。曇天くらいが宜しい。
「この狭っ苦しい部屋にお集まり頂きありがとうございます」
人の部屋を狭っ苦しいとか言うな。というか、あんたの持ち物の物件の部屋だろうが。しかも、集まってもらったというよりは、あんたが半強制的に集めたんだろうが。まぁ、その手先となって、実際に声を掛けて回った俺が言うことじゃないが。
と、心の中でぶちぶちと文句を唱えつつも、口には出さないでおく。人が喋っているときに横から口を出すのは非常識なことだからな。自分の言いたいことを我先に言おうと人の言葉を遮って押し退けてでも声を張り上げるような奴とは違うのだよ。誰のことかって？　テレビを付けろ。すぐ分かる。
さて、そんなわけで俺が常識を弁えて大人しくしている前で、二十日先輩はふらふらと体を前後左右に揺らしながら益体もない挨拶を続け、他の面子は俺と同様に大人しく先輩の話を聞いたり聞いていなかったりしていた。
眼鏡先輩は二十日先輩を無視して堂々とテレビと向き合ってチューハイをちびちびやっていた。柚子はするめを齧っている。清原は真面目に二十日先輩の与太話を聞いている。京島は一応真面目に二十日先輩の話を聞く姿勢をとってはいるが、なんだか納得いかないといった渋い顔で首を傾げている。俺の真下の部屋の後輩女子はニコニコとにこやかな笑顔で二十日先輩を見上げている。そして、絹坂は俺の横に居座って何が面白いのかニヤニヤしている。
「えー。というわけで、本日はお絹ちゃんの歓迎会なんだけど、まぁ、これから皆、楽しく仲良く元気に暮らしていきましょうってこ

とで、乾杯の挨拶をしたいと思います。かんぱーいっ！」
既に酔いの回っている二十日先輩がぶつくさ何かを言った後、なんか、よくわからんうちに乾杯の発声が為され、めいめいは慌てて自分のコップを手に取ってコップをぶつけあった。この酔っ払いは結局何が言いたかったのか全く分からなかった。
しかし、こんな朝っぱらから酒を飲むなんて、なんとも不健全だなと改めて思わざるを得ないな。まだ、タモさんが絶妙なトークをする時間の前だぞ。
「さ、冴上」
朝から酒を飲む行為に大きな違和感を感じていると、京島が遠慮がちに話しかけてきた。何故だか絹坂が無言で俺の腕を抱き寄せ、京島の表情が険しいものになるが、素早く、その腕を絹坂から取り上げて、自由にさせておく。右腕を取られては酒が飲めんではないか。
結局、三人は気まずい空気で一瞬黙り込む。あぁ、この空気、勘弁してくれ。
「あ、あー、で、何か用か？」
重苦しい空気を打破すべく、軽く咳払いをしてから京島に用件を尋ねる。
「あ、あの、だな。えっと、その、用事っていうか、私に部屋に来てくれって言ったのは、この、彼女の歓迎会のためなの、か？」
「うむ。そのとおりだな。いや、二十日先輩がやるといって聞かんのだ。こんな面倒くさい上に、昼日中から酒を飲むなんていう非常識かつ不適切な行事だからな。まぁ、二十日先輩とすれば酒さえ飲めれば何だってよいのだろうよ」
「そ、そうか。そうだな」
京島は硬く薄い笑みを浮かべて、何やらぶつぶつ口の中で呟いてから、チビチビとレモンサワーを飲み始めた。
「先輩。先輩」
京島との会話が終わったところで、絹坂がこっちを向けとばかり

にガクガクと俺の体を揺さぶってくる。
「何だ。揺らすな」
飲酒している人間を不用意に揺らすなどゲロをかぶっても文句を言えぬ所業だぞ。とはいえ、まだ飲み出してからいくらかしかしていないゆえ、胃の中のモノを逆流させることはないが。
「先輩は次何飲みますかー？」
絹坂はにこにこ笑いながら俺の持つビール缶を指差す。
気付けばいつの間にか中身がすっかり空に近くなっている。のんびりしている割には、相変わらず細かいことに気付く奴だ。
「ふむ。では、ウイスキーにするか」
「何。ウイスキーにするの？　早くない？」
目の前に空のビール缶を目の前に積んでいた二十日先輩が言った。相変わらず酒のことになると目敏いな。テストがいつだったか忘れるくせに、酒が商品に出るというイベントは忘れない先輩らしい。
「いや、いいウイスキーがあるんで、飲みたいかなと」
有名国産メーカーの歴史のある代物だ。このウイスキーの中にもランクがあるのだが、今あるのは、中の下くらいのレベルのものだ。それくらいのレベルのものでも云千円くらいの値が張る。普段何百円のビールやチューハイを飲み、千数百円の焼酎を水で割ってちまちまやっている大学生からすればかなりハイレベルな値の酒だといえる。こんな高い酒を味わうのは、以前、先輩が手に入れてきたスコッチを飲んだ以来ではないか。
「あ。ホントだ。確かに、いい奴だ。あたしも飲みたい」
「ん？　先輩が持ち込んだんじゃないんですか？」
いつの間にか置いてあったから二十日先輩が以前のスコッチのように持ってきたのではないかと思っていたのだが違うらしい。
「あたし、こんな高いの買わないもん。高いの買うくらいなら安いのたくさん飲む」
あぁ、まぁ、確かに、ウワバミと名高い先輩だとそうかもしれんな。酒の味なんてわかっているのか疑わしい。とはいえ、酒か酒じ

ゃないかだけは敏感で、酔っ払ったところで、「焼酎水割り」だと偽って水を飲ませようとしても、目敏く非アルコールであることを見破り、酒を寄越せと大暴れする人なのだ。
「じゃあ、あのときのスコッチは？」
「馴染みの飲み屋のおっさんがくれた。これやるからいい加減帰れって」
どんだけ迷惑かけたんだ。先輩だと出禁の店とかありそうだな。
「じゃあ、これ、誰が持ってきたんだ？」
「あー。はい、私です」
俺の問いかけに予想外にも俺の部屋の真下に住む後輩女子が名乗りを上げ、俺だけでなく他の連中も合わせて驚いた。俺はてっきり二十日先輩か眼鏡先輩か誰かが持ち込んだのだと思っており、他の連中もそんなふうに思っていたようだ。まさか、酒とは縁遠そうな大人しい感じの後輩女子が渋いウイスキーを持ち込んできたとは。
「気が利くじゃーん！　よーしよし！　良い子だ！　良い子だ！」
二十日先輩は大喜びで後輩女子を抱きかかえて頭をわしわしと撫で始めた。あんたは動物王国のじいさんか？
「あ、わ、わー。あ、ありがとうございます」
後輩はされるがままになり、困ったように笑いながらも礼を言った。礼を言うのは実際に酒をがばがば飲む二十日先輩や俺、眼鏡先輩たちのような気がするのだが。
「一体、これ、どーしたの？」
眼鏡先輩が気を使って尋ねる。
「えーと、春休みに実家に帰ったとき、親がお土産にって持たせてくれたんです」
二十日先輩に揉みくちゃにされながら後輩が言った。
「親がお土産に？」
「うちは酒屋なんです。だから、お酒は手に入りやすいんです」
はぁ、なるほど。ん、ていうか、じゃあ、それは店の商品なんじゃないか？　店の経営的に大丈夫なのか？　あぁ、でも、小売店の

利益分を差し引いて、かかるのは仕入れ値だけだから、土産に持たせても大した損ではないのか。
「あと、他にもワインとか焼酎とか日本酒とかうちの冷蔵庫とかにたくさんあるんですけど、持ってきていいですか？」
後輩は更に殊勝なことを言い出した。彼女の言葉に、人並み程度に酒が好きな俺と眼鏡先輩は顔を見合わせた。酒は欲しい。特に上手い酒は。このウイスキーを見る限り、残りの酒も期待できる。しかし、後輩に酒を強請（ねだ）るのはみっともない。俺と眼鏡先輩はさほど仲がいいわけではないが、目だけでそれだけを会話した。しかし、一つの事実に思い当たって俺たちは黙っていることにした。
「え？　酒！？　わーい！　ホントにくれるの！？　ラッキーありがとーっ！」
黙っていても、酒大好きな二十日先輩が貰いたがるに決まっているのだ。
「ええ。親も世話になっている人にあげなさいって持たせてくれたもんですから。今、持ってきます」
中々よくできた酒屋の娘はずっと浮かべている穏やかな微笑のまま言い、席を立った。
「それなら、ありがたく頂こうじゃないかっ！　後輩！　取りに行くの手伝ってやれ」
二十日先輩が意気揚々と酒を求めた結果、俺と眼鏡先輩は一言も口を開かず、後輩の酒に集るような言動をすることなく、酒を口にできるというものだ。やれやれ、変にプライドが高い奴ってのは面倒くさいもんだな。

厄病女神以外全員酔っ払い

ふと窓の外を見ると、真っ赤になった太陽が空を真紅に染めながら西へと下っていくところだったので、俺は非常に驚いた。

とはいえ、都会でもこんなにも綺麗な夕焼けが見れるのかと感慨に耽ったわけではない。そんなこと如きに心動かされるほど俺の心根は純真ではない。俺を知る者は誰もが言うものだ。心根がねじ曲がっている。と。余計なお世話だ。

俺が夕日を見て驚いたのは、ただただ単純に時間の経過を実感したからに過ぎない。

というのも、我々が厄病女神の歓迎会と称して、酒を飲み始めたときは、まだ太陽も東の空を昇り途中の午前だったというに、いつの間にやら半日が過ぎ去ってしまったことに驚愕したのである。半日をただただ酒をかっくらう行為に費やしてしまったわけだ。なんと、非生産的なことか。とはいえ、人はよく費やされた時と金を嘆くものだが、どちらも嘆こうか喚こうがどーにもならんものの代名詞だ。世の中、うまくいかんようになっているものだ。

そして、時というものは有限であり、常に消費され続けるものだ。いつまでも時間に余裕があると思ってはいけないのである。何が言いたいのかというと、つまりは、

「冴上ぇー。聞いてるのかぁーぁー？」

「ん？　あぁ、何だっけ？」

「んだからなぁー。私はなー。自慢じゃないけど、モテるんだぉ」

自慢だろ。いや、まぁ、ここは大人しく話を聞いておこう。しかし、どうでもいい話っぽいなぁ。時間は限られているというのに。

「まぁ、確かに、お前はモテるだろうな。それはわかる」

「わかってくれるかぁー？」

「あぁ、わかった。わかったから、離せ。俺は便所に行きたいんだ」

こんな話に付き合っている暇があったら、便所に引き籠って色々

とせねばならんことがあるのだ。
「ベン・ジョンソン？」
「何でそこで一昔前の陸上選手の名前が出てくるんだ。いや、まぁ、ちょっと語感が似てるけどな」
「んぁあ、ベンはどーでもいいんだー」
気軽にファーストネームで呼ぶな。友達か。
「それでなぁ、私はモテるんだけどなぁ。ラブレターもたくさん貰ったことがあるんだぁ。家に全部取ってらる、ある」
あぁ、そういえば、あったな。以前、こいつの家に邪魔をしたときに見させてもらったような気がする。そうだ。アレは、何故だか、俺が二十日先輩の恋文を書く羽目になったときに、参考として読ませてもらったのだったな。
「んだけどなぁ。だけど、なーんでかぁ、同性から貰うこともあるんだー」
同性からラブレターか。まぁ、わからいではないか。こやつは背も高く、どっちかというとかっこういい容姿をしているからな。いや、しかし、聞いたことはあったが、女子が女子を好きになるという現象が実際に存在したと初めて認知することになった。
しかし、何だこれ。俺は恋愛相談でもされているのか？　俺に恋愛について相談するとか、明らかに相談する相手を間違えている上に、何故、わざわざ俺なのか理解に苦しむ。
「それにらなぁ。肝心の、んわ、私が好きな人からぁ、は、貰えないんだー」
「むぅ、まぁ、皆が皆、相思相愛になれるならば、それはそれで結構なことだが、実際のところ、それはかなり難しいものだからなぁ」
「どうしたらいいと思う？」
「は？　いや、何がだ？」
「話の通じない奴だなぁー」
それはお前の話し方が悪いせいだと思う。断じて、俺の理解力が足らんとかそんなわけではあるまい。

「らからっ！　私が好きな相手からラブレターを貰うにはどうしたらいいんだっ！？」
「耳元で怒鳴るなっ！　うっさいわっ！　鼓膜が痛いっ！」
「しかもぉー、その、好きな相手には、もう相手がいるんだぁ。なーんでか、いつの間にかー、長い休みの間に、いっつの間にかどこかからか現れて、あれよあれよという間に、付き合っているってぇ、どういうことだ、どういうことなんだよぉ……」
そいつは勝手にぶつぶつぶつぶつ呟くと、一人で勝手に意気消沈して嘆きはじめた。一体、何が言いたいというかしたいんだこいつは。
「とりあえず、まぁ、飲め」
「ん。ろむ。飲む」
レモンの缶チューハイをそいつのコップに注いでやる。俺が酌をするというのは、極めて珍しいことであるが、此度は理由あってのことである。要するに、もっとアルコールを摂取させて眠るか具合悪くなるかさせて大人しくさせようという魂胆である。
俺がレモンチューハイを注いでやると、今まで散々俺に絡んできていた京島はぐびぐびと喉を鳴らして飲み干していく。
しかし、あれだな。普段はおとなしくて物わかりがよい京島が酒を飲んで酔っ払うとこうまで面倒くさいっつうか、やけに絡んでくる迷惑な酔っ払いに変貌するとは、まったく驚きである。もはや、人格が変貌していると言ってもいいレベルではないか。アルコールの力は恐ろしいものだな。というか、こいつは、ストレスか何かでもため込んでいるんではあるまいか？　そのせいで、酒を飲むと日頃の鬱憤とかストレスを吐き出すが如く、こんなにもキャラ崩壊してしまうのではなかろうか。
「飲んらっ！　飲んらぞっ！　酸っぱいなっ！」
京島は真っ赤な顔で叫びながら、俺の脚を叩く。こいつはさっきからずっと俺の隣に座り込んで腕を組んできたり、脚を叩いたり、耳や髪を引っ張ったりと散々なことをしてくれている。

「あー、もううるさい奴だなー。ほら、こっちも飲め。巨峰だとさ。えぇと、こっちはマスカットか。白ぶどうもある。なんだ。全部ぶどうではないか。しかも、どれも量が中途半端に残っている。いいや、混ぜてしまえ」

巨峰とマスカットと白ぶどうのチューハイやらカクテルやらを全部混ぜて京島のコップに注ぐ。京島はなんだかぼーっとした顔でそれを眺めていて、全て混ぜ終わると、一気にぐびぐびと飲んでいった。大変良い飲みっぷりである。京島の顔は既にライオンがごきげんようする番組が終わったあたりから真っ赤であったが、今なお更に朱に染まり、無言で仰向けに倒れ伏した。

急性アルコール中毒などで卒倒したのであれば大変な問題であるが、様子を見るに、ただ酔っ払って眠っているだけのようなので放っておくことにした。俺は先刻から厠に行きたくてしょうがないのだ。小水や糞が出そうなわけではない。ゲロが口から出そうなのだ。さっきから何度も喉の奥に酸っぱいものがきている。何度その酸っぱいものを胃の中に押し込めるが如く嚥下したか分からぬ。

便所に向かおうと座を立って、一歩二歩歩くと、床に隣室のダメ漫画家こと柚子が転がっていて非常に邪魔だったので頭を足で軽く突っつく。

「おい、邪魔くさいぞ」

「あうあうあうあー。ちょ、ちょっとやめてよー。今、凄い頭が痛いんだからさー」

柚子は頭を抱えてうんうん唸りながら床を転がり回る。こいつは酒を飲み過ぎると頭痛が酷くなるタイプのようだ。

うんうん唸っている柚子は無視して跨いでいくことにする。人に跨がれると出世しないという迷信だか何だかを聞いたことがあるが、まぁ、漫画家には出世も何もあるまい。故に平気であろう。

どちらにせよ柚子など気にする必要はあるまい。華麗にスルーして便所へ向かったところ、使用中であった。一体、誰が入っているのか？

中に問いかければ一発でわかるところではあるが、口を開くと、声よりも先に何かが飛び出そうな具合なので、極力口を開くのは避けたいところである。故に、とりあえず、部屋の中を見渡すことにした。部屋にいない奴がトイレに籠っているということだからな。

まず、柚子は床に転がってうんうん唸っている。

京島は気持ち悪そうに寝ている。

我が後輩の清原は、未成年ゆえにダメだと固辞するところを、木暮先輩が無理に酒をちびーっと飲ませたところ、一口二口でダウンしてしまった。こちらもまた急性アルコール中毒だと困ったことだが、様子を見るに、あまり問題なさそうだったので放っておいている。しかし、ほんの少し口に含んだくらいで顔が真っ赤になって寝てしまうって弱すぎだろう。

眼鏡先輩は厄病女神にくっついてしきりとぶちぶち愚痴っていた。

「でさー。教育科学の的場って教授が、これまた、つまらねーダジャレばっか言うのさ。もうほんと何が面白いのかって呆れるくらいのを、連発するの。皆も呆れて無視してるんだけど、言うのさ。で、目と顔で反応を求めてくるわけ。面白くないって面と向かって言うわけにもいかないし、かといって、面白くもないから、まぁ、スルーするしかないんだけど、このやりとりが日に何回もあって、もう面倒くさいのなんのって、何で、こんな下らないダジャレごときに気を遣ったり居た堪れない思いをしたりしないといけないのかって話なんだけどさ」

「はぁ、あぁ、そうなんですかー。はぁ、へぇ、ほぉ」

厄病女神は明らかに面倒くさそうな顔を全面に押し出して、気のない返事を繰り返している。もう何時間も絹坂は眼鏡先輩に捕まって話の相手をさせられている。たまに俺の方を見て「助けて」的な目で見てきたが、無視した。俺は俺で、京島に絡まれて困っていたからな。その視線に「助けて」以外の何かも含まれているような気がしたが、面倒くさいのでこれまた無視した。

この飲み会の発案者であるところの二十日先輩はどうしているか

といえば、先程から何が面白いのかテレビを見ながらゲラゲラ笑っている。ちなみに、テレビでやっているのはベトナム戦争のドキュメンタリーである。不謹慎にも程がある。とはいえ、二十日先輩は酒が入ると何でもかんでも面白くなってしまう御仁なのだ。お経を聞いても笑い転げかねん。

となると、トイレに籠っているのは、真下の部屋に住まう後輩女子か。名前を聞いたような気がするのだが、すっかり忘れてしまった。思い出そうとすると頭がズキズキしてしまい、思考もままならぬ。

とりあえず、トイレをノックしてみる。

「あ、はーい。えと、入ってますー」

「あー」

さて、どう言ったものか。トイレに籠っているそこそこ親しくはない後輩女子に、ちょっと吐きたいから便器を貸せ。と、如何に穏便に話すべきか。

と、その前に、自分の都合を伝えるだけでなく、まずは、相手の都合を聞くべきではないかと思い至る。そもそも、何で、こいつはずっとトイレに籠っているんだ。二、三時間くらい前に気付いたときには、姿が見えなかった気がするから、そのときからずっとトイレに籠っているようだ。

「あー、大丈夫なのか？」

「え？　あー、はい、えっと、うーんっとー」

「調子悪いのか？」

「そ、そーですねー。少し。少し。はい」

口調はいつもどおりではあったが、声の調子がイマイチ具合宜しそうな様子ではなかった。

「出れそうか？」

「んー、あー、ちょっと、無理かも、しれないです……」

「そうか。ごゆっくり、じゃない。あー、まぁ、そこで休んでいなさい」

「どーも、すいません……」
いまいちあまり親しい間柄ではないので、性にもなく遠慮してしまう。これが、男か絹坂みたいな気心の知れた相手ならば、とっとと便所から出て外で吐いてろ。と追い出すところなのだがな。
さて、困ったことになった。この胸に湧き上がる液状のものをどうすべきか。心なし頭を上に向けていないとオエっと出てきそうな気がするので、天井を見て考える。
「せーんぱーいっ！」
居間の方で声がする。
「ちょっと、この人、なんとかしてくださいーっ！　ほっぺた舐めてくるんですけどーっ！？　わぁっ！　ちょっ！　やめてくださいーっ！　私の顔を舐めたりキスしたりしていいのは先輩だけなんですよーっ！　あ、先輩って言ってもあなたじゃないですからーっ！」
厄病女神の悲鳴が聞こえてくる。眼鏡先輩は酔っ払うと愚痴っぽい上にキス魔にもなるらしい。それよりも、何よりも、この喉元に来ているやつをなんとかせねばならん。どこに吐けばいいんだ！？
便器は使用中と、なると、台所か？　しかし、食事を作るところにそんな真似はできまい。では、どこか？　ゴミ箱とかバケツに新聞紙を敷いてそこに吐けばすぐ処理できるはず。これならば被害は最小限であろう。しかし、問題はそのゴミ箱かバケツに新聞を敷く作業をする猶予もないほどに俺が追いつめられていることであり、
「わーっ！　先輩ーっ！　助けてーっ！」
あっ！　やめっ！　こっち来んなっ！　その勢いのまま体当たりしてくるんじゃなーいっ！
「先輩ー。聞いてくださいよ。あの眼鏡の先輩ったらうぎゃあああっ！？　先輩っ！？　大丈夫ですかっ！？　生きてますかーっ！？
ていうか、床が酷いことにーっ！」

厄病女神の引っ越し

その日の俺の具合は過去最悪といって差し支えのないものであった。

腹の底からこみ上げる吐しゃ物と液状の排泄物は途絶えることを知らず、俺はいつまでも便座を温めながら、気持ちの悪い臭いを発するバケツを抱え込む羽目になっていた。このバケツの臭いを嗅ぐだけで吐きそうになる。俺が吐いているのは実はこのバケツから発せられる臭いのせいではないかと勘繰るも、それを確かめる余裕もない。バケツを床に置こうと姿勢を変えた途端に腹の底から食道を逆流する液体の置き場を求めてバケツを抱え込む羽目に陥るのだからいやはや困ったものである。

その上、頭が痛むこと痛むこと。頭蓋骨の中に小さな人間が何十人もいてハンマーで頭蓋骨を中からガツガツ叩いているのではないかと思えるような頭痛が俺を苛む。

あー、それから、唐突に心臓に通っている神経が一生懸命働きだしたのかと思うほど、心臓が動く度にその鼓動が強く意識される。血液がどくどくと送り出され、血管の中を流れている感覚がある。気のせいかもしれないが、あるったらあるのだ。

頭は割れるように痛い。腹はぐるぐるいうし、吐しゃ物と排泄物は止むことがない。あぁ、それから、この間、指を紙で切ったので、そこがちっとばかし痛い。

そのような最悪の体調を俺はもう何時間もやっていた。吐き気がどうしようもなくなって口を押えながら飛び起き便所に飛び込み、マーライオンもかくやというほど吐しゃ物を滝のように便器の中に注ぎ込んでから今度は腹痛を覚え、ズボンを脱ぐや否や液状の排泄物を吐しゃ物の上に流し込んだのが、確か四時半くらいで、それ以来、たまに、便所を抜け出してバケツを取りに行ったり、喉の渇きを覚え、水道水をがぶ飲みした以外は、ずっと便器をけつで温め続

け、頭痛と腹痛に苛まれつつ、たまにうつらうつらと寝ぼけては、吐き気と便意ではっとして便器とバケツの世話になるといった状態であった。

で、今は昼少し前である。バケツを取りに行った際に、拾ってきた携帯電話が時刻を知るのに役立った。

ところで、何故、俺がこのような目に遭っているのかといえば、その原因は、ここ最近のスケジュールのせいであろう。

昨年度末より、学部や学科の卒業する先輩を見送る会やら就職おめでとう会やら残念会やら何やらで、どういうわけだか、俺は尽く幹事を仰せつかり、宴会の度に、俺は、店を選び、コースを予約し、二次会をセッティングし、三次会ができる店を探し、四次会のカラオケでカードを作り、誰かの私室で行われる五次会で飲み食いする酒とツマミを調達した。飲み会では幹事という役柄ゆえ、おちおちのんびりと酒を飲み、飯を食う暇もなく、注文を店員へ伝達し、出席者各位の何が食いたい何が飲みたいという我儘を断固として封じ、二次会三次会四次会へ移動する際には、参加者連中を引率し、帰る奴にはタクシーを宛がいと、何で、俺がそこまでやらんとならんのか。俺は幼稚園の先生か。と、五次会で気炎を吐きながら、飲み食い足りない分をコンビニで調達した安いビールとつまみで満たした挙句に吐いて寝た。

こんなことを繰り返す合間に、俺が所属する倶楽部でも先輩の見送り会やら定例の鍋会やら旅行会やらがあり、こちらでは幹事をすることはなかったが、その分、思うがままに酒を飲み、飯を食らい、飲み食い過ぎて吐いて寝た。

それらの隙間隙間で、二十日先輩が押しかけてきて夜中酒に付き合わされたりして吐いて寝た。

つまり、毎日、飲んで食って吐いて寝ていたわけである。手ひどく飲んだ翌日は当然二日酔いに悩まされるのだが、それでも夜になると、また飲みに出かけ、そして、吐いて朝に帰って寝て、起きて吐いて気持ち悪い思いをして、夕方には具合が少しはマシになり、

夜にはまた飲みに出かける。という日々を送っていた。
そのツケなのか何なのか知らないが、そのせいで今日は特に酷い二日酔いだった。死にそうだ。神よ。いるなら助けてくれ。俺は基本的に無神論者とまではいかないが、神とかいう奴の存在に懐疑的であるが、腹痛のときばかりは神に祈るのだ。
そういえば、俺が便所でウンウン唸っている間、我が家に寄生している厄病女神はどうしているのだろうか？
いつも、俺が具合を悪くして便所に籠っていると「大丈夫ですかー？」とか間抜けた声をかけてくるものである。便所から出れば水を出し、薬を出し、腹が減ればおかゆや茶漬けを出すのが奴のいつもの行動なのであるが、今日はそんな様子が全くない。
痛む頭を宥めつつ記憶の底を弄（まさぐ）ると、そういえば、朝の三時頃、酔っ払ってへべれけになって部屋に転がりこんだとき、既に絹坂の姿はなかったかもしれない。出迎えられた覚えがない。寝ていたのかもしれないが、しかし、絹坂は俺が何時に帰ろうとも、起きてきて俺の世話を焼いてくる奴だったはずなんだが。
まぁ、煩い奴がいないのはいいことだ。具合が最悪のときに、周りでうるさくぎゃーぎゃーいわれるといつも以上に機嫌が悪くなるからな。
とはいえ、絹坂の不在に気付いたとなると、俺の具合もだいぶ上向いてきたようだ。もうとっくの前に腹の中は空になって吐くものも出すものもなく、ただ異様に酸っぱい透明な液がたまに口から出るくらいだ。

更に幾時間か便所でぼーっとして、便所を出るタイミングを計り、なんとかかんとか便所から出ても、この間のように床に汚物をぶちまけてひどい目に遭わないで済んだ。
部屋に備蓄している薬をがぶ飲みして、ぼんやり昼過ぎのニュースを見ていると、壁の向こうがガタガタと煩いことに気付いた。
俺の部屋は二階の最も端であるからして、壁の向こうにある隣室

は、あの阿呆漫画家の柚子の部屋しかない。となると煩くしているのは柚子ということであろう。

これが、まぁ、ちょっと掃除しているとかモノを片付けているとかいうレベルの音であれば、あいつもついに掃除を始めたのかと感心こそすれ文句を言うほどではない。俺はそれくらいの音が聞こえたくらいでいちゃもんつけるような迷惑な人間ではない。音が頭に響いて治りかけの頭痛に拍車をかけているような気がするが。

しかし、今回の煩さのレベルはそんなものではなかった。部屋の中に大の大人が何人も上り込んで家具から何から片っ端から動かして外に運び出しているような騒音だ。文句を言う前に、一体何をしているのかと気になってくる。更には廊下の方からも何かを隣室に運び込んでいるような音まで聞こえてくる。まるで、引っ越しでもしているようかの騒音である。

ん。引っ越し？　いや、まぁ、この時期だしな。引っ越しがあることはおかしくない。

しかし、柚子の野郎はいつ漫画界から放逐されて失業して無職になってもおかしくない漫画家ではあるが、一応、まだ仕事は続けているようだし、引っ越しをするような理由も思い至らないし、一応、知人であり、いくらか会話はしているが、引っ越しするようなことを言っていた覚えもない。

としても、これは引っ越しをしているとしか思えない音である。節々が痛む上に非常にだるい体をなんとかかんとか動かして、窓の外を見ると案の定引っ越し会社のマークが描かれたトラックが停まっており、引っ越し会社のバイトだかパートだかのおっさん兄さん連中が梱包された家具や段ボール箱を運び込んでいる。

しかし、柚子の部屋の家具が出されて、引っ越しトラックから荷物が運び込まれるとは解せぬ話だ。うちの木暮荘には空室が二つはあり、新規の入居者はそこに入れるのが自然ではあるまいか。何故、わざわざ人がいるところに、そいつを追い出して、そこに入居するというのか。そして、柚子はどこへ行くというのか。

疑問は尽きないが、今現在の俺はそんなことを確認している場合ではない。なんとか具合を落ち着けることが肝要だ。下手に動き回って吐瀉物を床にぶちまけては目も当てられない。

というわけで、俺は隣室の騒音に顔をしかめつつ、お茶漬けを啜り食ったり、テレビをぼんやり眺めたり、シャワーを浴びたり、再び便所に籠ったりしていた。

三時頃になって、だいぶ俺の体調は回復し、吐き気や腹痛はすっかり鳴りを潜めた。まだ少し頭痛が残っているものの、大した問題ではない。頭痛を感じるのはよくあることだしな。

そういった頃合になると、隣はすっかり静かになっていた。いくらか前にトラックが走り去っていったのを窓から確認していたので、引っ越し作業は粗方終わったのであろう。一体、どこのどいつが隣に越してきたのか気にならないではない。そして、何故、柚子が追い出されたのかも気になるものだ。

というようなことを考えていると、チャイム音が鳴り響いた。

俺はピンときた。どんなに鈍い奴でもわかるものであろう。このタイミングだぞ。引っ越しが終わって一段落。早くもなく遅くもなく飯時でもない午後のちょうどよい時間。引っ越しの挨拶をするのであれば今であろう。

人間、第一印象は大事であろう。人間関係の始まりなのだから、当然である。初対面で舐められてはそれ以降も舐められるからな。おそらく相手は今年度の入学生であろうから年上の威厳というものを見せつけてやらねばなるまい。相手が語尾に「ッス」を付ければ敬語を喋っているのだとか思い込んでおるようなチャラ男とかであったら問答無用で蹴り飛ばすくらいの勢いでいかねばなるまい。

シャワーを浴びた後、きちっと見苦しくない服に着替えているし、顔も洗ったし、髭も剃っている。身嗜みについて問題はあるまい。一応鏡で確認してから、髪の毛を撫でつけつつ、玄関へ向かう。

その途中、再びチャイムが鳴らされた。

「はいはい、今出る」

思わず独り言が口を突く。
初対面の相手に舐められぬよう気持ちいつもより余計にしかめ面をして、ドアを開けると、毎度見慣れた厄病女神の間抜け面がそこにあった。
「なんだ貴様か。何で、わざわざ俺の部屋に入るのにチャイムなんぞ鳴らすのだ。俺が追い出しても入ってくるくせに。合鍵まで持っておるのにチャイムなんぞ必要あるまい」
俺の詰問に対して、絹坂はいつものような腑抜けた笑みを浮かべながら言った。
「ふーふーふー、それが違うんですねー」
何が違うというのか。俺の問いかけの答えになっておるまい。前までから俺の問いかけに対する受け答えがおかしいことがあったが、ついに日本語が話せなくなってきたか。
「今日、私が来たのは、重要な意味があるのですー」
「ほう。重要な意味ねぇ」
俺は急に痒みを覚えた手首をぼりぼり掻きつつ絹坂の話を流し聞く。部屋に戻って本でも読んでいようかな。あぁ、そういえば、今度、組織で行く旅行会のしおりをまだ読んでいなかった。明後日出発だっていうのに、まだ行き先もわからん。
「まぁまぁ、まずは、これをー」
「何だこれは？　蕎麦、と、タオルか？」
絹坂が差し出したのはパックに入った生麺タイプの蕎麦と粗品と書かれた紙包みだ。大抵、この紙包みにはタオルが入っているのが定番であろう。
「これは、おい、まさか……」
「どうもー、今日、隣に引っ越してきた絹坂と申しますー。これから、宜しくお願いしますねー。先輩ー」
絹坂はにまにまと満面の笑みを浮かべて言ったのだった。

厄病女神と引っ越し蕎麦

「お前、ちょっと、中入れ。話したいことがある」
「わー。先輩にお誘いされるなんて嬉しいですねー。キャー。部屋に連れ込まれちゃいますー」
絹坂は嬉しそうにキャーキャー騒ぎ出す。毎度毎度やかましい奴だ。
「やかましいわっ！　黙ってろっ！」
「ははーい」
怒鳴っても平然とにこにこ笑っているあたり、まったく、こいつはタダモノじゃない気がする。慣れといえば、慣れかもしれないが、しかし、高校で初めて会ったときから、俺が短気に任せて怒鳴っても結構平気そうにしていたような気がする。こいつの神経は随分と図太そうだ。長生きするに違いない。
とにかく、絹坂を対面に座らせて、俺は詰問する。
「一体全体、どーいうつもりだ？」
「どーもこーもないですよー。たーだ、お隣に引っ越してきたのが、たーまたま、かわいい後輩で、愛すべき彼女だったって話じゃないですかー」
んな馬鹿馬鹿しい偶然があって堪るか。
「おのれ、謀ったな」
「謀ったなんて人聞きが悪いですねー」
謀らずも偶然に絹坂が俺の隣室に引っ越してくるなどということがあり得るはずがない。そこには何かしらの陰謀が介在しているはずである。
まず、第一に大家である二十日先輩は取り込まれていると考えて間違いない。まぁ、あの人はビール缶一ダースでも日本酒、焼酎、ワイン一瓶で買収されるような人だからな。そもそも、先輩はこの厄介な厄病女神のことを気に入っている節がある。こいつのかぶっ

ている猫に騙されているに違いない。
次に、隣室の前の住人である柚子だが、こいつは取り込まれたのか無理矢理追い出されたのかわからん。基本的に立場が弱い奴なので、後者であろう可能性が高い。
しかし、あの物があふれ返ってどっちらかって足の踏み場もない部屋をなんとかしたというか、できたのが信じ難いな。
「お前、よくもまぁあの部屋を何とかできたな」
「ふーふーふー。引っ越し業者を侮ってはいけませんー」
あぁ、何だ。引っ越し業者の力か。いや、まぁ、プロだしな。
「その分、かなりお金はかかりましたが、なんとかなりましたー」
「で、柚子はどこにやったのだ？」
「えーと、どっか空いている部屋に入れておきました」
俺は置き場に困った余分な段ボールの行き先を聞いているのではなく、柚子川誠という一応俺の友人と呼んでも差し支えない男の行き先を聞いているのだが。
しかし、よくもアレだけ面倒くさがりで怠惰な男を立ち退きさせるとは、どんな説得をしたというのか。
「引っ越しを奴は承諾したのか？」
「二十日先輩は喜んでＯＫを出してくれましたよ」
「そんなことはわかっておる。大家の許可なしに引っ越しなどできるわけなかろう。どうせ、賄賂でも渡したのであろう」
俺の言葉に絹坂は黙ってニコニコと腑抜けた笑みを浮かべるばかりだ。
あの極めて単純な御仁はアルコールを引き渡せば大抵のことはＯＫしてしまうからな。いつか騙されたりしないか他人事ながら心配になる。
「あの単細胞な蟒蛇（うわばみ）先輩はさておき、柚子には何と言って立ち退かせたのだ？」
「ふぇ？」
俺の問いに彼女は小首傾げて阿呆みたいな声を出した。そして、

暫しして言った。
「別に、何もー」
「はぁ？」
別に、何もーとは、如何なることか？
「貴様、柚子に何と言って立ち退かせたのか忘れたというのか？」
絹坂の記憶力がその程度だとしたら、うちの大学の入試試験は相当なザルということになりかねん。日本における学力とは、つまるところ、記憶力によるところが大であるからな。
「いえー、忘れたも何も、あー、柚子さんには、特に何も言ってないだけですー」
特に何も言ってないとは、
「貴様、無言で、無理矢理、奴を立ち退かせて別の部屋に放り込んだのか？」
「えーまー」
えーまーじゃなかろう。何という鬼畜の所業か。悪徳な不動産業者でもそんな強制的な真似はすまい。警察沙汰になるからな。
「奴は抵抗しなかったのか？」
「寝てました」
「寝てるのをそのまんま荷物と一緒に持って行ったというのか！？」
「えーまーそーですねー」
俺は驚き呆れて言葉を失った。なんと強引な。俺は普段人に同情などしない主義であるが、今ばかりは柚子に同情せざるを得ない。
「なんて奴だ……」
絹坂の顔をまじまじと見つめて呟くと、何を勘違いしたのかそいつは頬を桃色に染めて照れはじめた。
「そんな、見つめないで下さいー」
何だ。こいつ。
「あ。そだ。お蕎麦茹でましょうかー？　引っ越し蕎麦ですー。他の人にはもう配ったんですけどー。先輩とは、どうせだから一緒に食べましょうー」

そう言って、絹坂はパックに入った蕎麦を持って台所へ向かった。勝手に話を進めるな。
「引っ越しが忙しくてお昼食べてないんですよー。先輩は何食べましたー？」
「茶漬けを食った」
腹がぎゅるぎゅるで大変なことになっていたからな。それくらいしか腹に入らなかったのだ。
「えー？　お茶漬けだけですかー？　それだけじゃ足りないんじゃないですかー？」
確かに、それだけだと腹の足しにはなるが、夕飯まで我慢できるほどではない。具合が回復した今、腹が減っていないか減っていなくないかと問われれば、まぁ、確かに、減ってはいる。足りてはいない。
「まぁ、貴様が食うのであれば、私も馳走になっても良かろう」
「馳走になっても良かろうってー……。先輩ってば武士か何かなんですかー？」
「うちは神主の家系だ」
「どうでもいいですよー。じゃあ、お蕎麦茹でますねー。普通に冷たい蕎麦でいいですかー？」
「何でもよい」
そうして、絹坂は蕎麦を茹でて、そいつを大皿に盛り、備え付けのつゆを二つの小鉢に入れて、もりそばの完成だ。海苔があればざるそばだが面倒くさいので省略した。うちには海苔はないしな。
「長芋があればとろろそばにできたんですけどねー」
「む。確かにな。とろろとそばの相性は非常に良いからな。しかし、あれは、どういうわけだか、とろろとつゆが別々になって出てくるから、つゆの分量を間違うと、先にとろろだけ無くなってしまうということがたまにある」
「あぁ、ありますねー」
俺と絹坂は他愛もない雑談をしながら蕎麦を食った。

その後、絹坂は食器を洗い、俺はやることもなかったので、未読の本を手に取り、さて、読もうかとしたところで、食器を洗い終えた絹坂が傍にやって来た。
「そうだー。先輩ー。私の部屋に来てくれませんかー？」
「何故にだ」
何故、俺が絹坂の部屋などに行かねばならんというのか。そこにどんな意味があり、どんな効果を生むというのか。
「何故ってそんなことを聞く方がおかしいと思いますけどー。だってー、私と先輩は彼氏彼女じゃないですかー」
そんなことを言いながら絹坂はまとわりついてくる。そうだ。そういえば、そうであった。何をまかり間違ったか、絹坂は俺の彼女なのであった。遺憾である。
「彼氏が彼女の部屋に遊びに来ることに大層な理由なんていらないじゃないですかー」
まぁ、言われてみればそのとおりではあるのだが。
「貴様に部屋に行って何をするというのか」
「何をするって、先輩って、何でもかんでも理由がないと動けない人なんですかー？」
「何も理由のない無意味な行動をしたくないだけだ」
時間は限りある有限なものであるからな。人間、合理的に生きねばならぬ。つまらぬ些事に時間を取られている暇があったら本を読むなり何なりして学習していた方がずっと有意義ではあるまいか。
「んー。理由ですかー？　あ、そーいえば、部屋の片づけがまだなんで手伝って欲しいんですよー」
何故に、俺が絹坂如きの引っ越し手伝いなどせねばならんというのか。かような雑用をさせようとは、貴様も偉くなったものだな。
とはいえ、俺の器たるや大洋よりも広く、チャレンジャー海溝よりも深く、天よりも高いゆえ、手伝ってやらぬわけでもない。
「彼女の引っ越しの手伝いするのに、どんだけ偉そうにするんですかー」

「やかましい。この俺が珍しく貴様の引っ越しを手伝ってやるというのだ。ありがたく思うがいい。しかし、面倒くさいし、かったるい。言っておくが、俺は今日、具合が非常によくないのだ」
「それだけ喋れれば全然大丈夫だと思いますけどー？」
俺と絹坂は互いにぶちぶち言いながら、俺の部屋を出て絹坂の部屋へと向かった。

厄病女神の新居

絹坂の部屋は大変シンプルというか、素っ気ないというか、モノがなかった。
間取りは俺の部屋と同じであり、まず、玄関があり、その脇に台所。その向こうに便所と風呂。部屋は二間あり、俺の場合は片方を茶の間として使い、もう一つを寝室としている。
台所には食器棚と冷蔵庫、炊飯器、電子レンジ、ゴミ箱が置いてある他、段ボールがいくつか放置してあった。奥の方に洗濯機。
俺が茶の間にしている部屋を絹坂も同じように茶の間にしているようで、真ん中に四角い小さな灰色のテーブル。その向かいに棚があって、その上に小さなテレビが置かれている。
もう一つの部屋には段ボールがいくつかと洋服ダンス、パイプベッドが置いてある。
それだけだった。それしかない。
「これまた、えらく閑散とした部屋だな」
そういえば、以前、地元の絹坂の部屋に行ったことがあったが、そのときも部屋は閑散としていた気がする。あまり、モノを置きたがらない奴なのやもしれん。
「んー。そーですかー？」
絹坂は首を傾げながら台所へ向かう。
「まぁ、座ってて下さいー。今、お茶を淹れますからー」
「俺は、貴様の引っ越しの手伝いをしに来たのだが？」
「まぁまぁ、そんなに焦らなくてもいいじゃないですかー。先輩ってば、せっかちさんなんですからー」
せっかちとか短気とか怒りっぽいとは、よく俺の性格を指して言われることである。自覚はしている。故に、気が向けば、少しはのんびりと急がば回れの精神を思い出し、一休みするようにしている。
というわけで、俺は大人しく絹坂の淹れる茶でも待っていること

にした。
ただ、座っていても暇でしょうがないので、テレビでもつけようかと思ったが、リモコンが見つからず、代わりにテレビを置いている台代わりになっている棚の中身を眺めることにした。
その棚には電化製品の説明書やら引っ越しの契約書やら何かがてきとーにぶち込んであるようだった。後で整理するのだろう。それらに混ざって何冊か大学ノートが放ってあった。
人のノートを勝手に読むのは不躾で失礼な行為である。しかし、そのノートの表紙に己の名前が書いてあれば別である。いや、正確には俺の名前ではない。そこに書かれているのは「対先輩用料理ノート」という表題である。だが、絹坂がただ「先輩」と呼べば、それは俺のことに他ならないはずだ。
気になった俺はそのノートを手に取り、パラパラと開いて、中身を覗いてみた。
案の定というか、やはり、表題の「先輩」とは俺のことのようで、ノートには様々な食材を食べたときの俺の反応や感想なぞが細々と延々と記載され、たまにメモや思いつきが書かれていた。たまに見直してまとめているようで、俺の好き嫌いが分類・分析され、俺の好みに合致し、かつ栄養バランスの優れたメニューが考案されていた。
「あー。先輩、何見てるんですかー」
絹坂は俺が手にしていたノートを取り上げて胸に抱き、例の如く、頬を膨らませた。
「何で、勝手に読むんですかー？　恥ずかしいじゃないですかー」
絹坂はぷりぷりと怒って、ノートを近くの段ボール箱の中に放り込む。
「お前、何で、あんなもん書いておるんだ？」
「何でって、そりゃあ、先輩の好き嫌いを研究するためですよー。先輩ってば好き嫌いが多いですからねー」
「んなもん研究してどーするんだ」

「何言ってるんですかー？　よく言うじゃないですかー。男を落とすには胃袋からってー」
よく言うのか？　いや、よく言うかどうかは知らんが、まぁ、とにかく、料理の上手い女はモテるっちゅう話か？　美味い飯が食いたきゃ飯屋に行けばよいのではないか？
俺の疑問に、絹坂はチッチッチッと舌を鳴らして指を振る。妙にムカつく仕草だ。
「レストランとか外食には、外食の良さがありますが、手料理には手料理の良さがあるんですよー？　そもそも、そんなに、毎日、外でごはんなんて食べてられないじゃないですかー。大抵の人は圧倒的に家の中でごはんを食べることの方が多いはずです。その家で、美味しいごはんを食べさせることができるかできないかで、女子の価値は大きく変わるんですよー」
そんなものか。
「それに、単純に、先輩だって、自分の好みのごはんが食べたいでしょー？」
「ん。まぁ、それはそうだが」
と、そこまで言って気付く。
「いや、待て。何で、俺が貴様の作った飯を食うと決めつけているんだ？」
「食べないんですかー？」
逆に問われて俺はとっさに反論しようとしたが、言うべき言葉が見当たらず、やむなく閉口した。
というのも、どういうわけだか、いや、どうもこうもないのだが、絹坂は何かと俺を世話したがる奴であり、俺は家事がそれほど好きではないからである。
夏休みに、こやつが俺の部屋に押しかけた挙句、寄生した際には、絹坂が率先して家事をするものだから、ついつい、俺は家事を怠け、全てを絹坂に任せてしまい、掃除も洗濯も絹坂がやり、勿論、食事の支度も絹坂がすることの方が断然多く、結果的に、俺は絹坂の作

る飯をずっと食っていたのである。
　ということはだ。今回、隣に引っ越してきた彼女は、夏休みのときのように、俺の世話を焼こうとするだろう。当然、料理もそこに含まれるはずである。自分がやらんでも料理が作られるとなると、俺は文句を垂れたりするかもしれんが、結局は食べるだろう。そのとき、その料理が俺の好みの味で、つまり、美味ければどうなるか。考えなくてもわかる。
「兵糧攻めか……」
　兵糧を絶つのではなく、兵糧を食わせるという斬新な兵糧攻めである。
「まぁ、そういうわけでー、私が美味しいごはんを作るために日夜先輩の好みについて研究することは大変良いことじゃあありませんかー」
「うぅむ……」
　俺は何とも言えなくなり、曖昧に唸っていた。
「まぁまぁ、お茶でもどうぞ」
「茶じゃなくてコーヒーではないか」
「先輩、紅茶よりコーヒーの方が好きじゃないですかー？　あ、インスタントですけどねー」
　俺は別にコーヒーやら茶やらの飲みものにそれほど拘りがあるわけではないので、インスタントコーヒーだろうが缶コーヒーでも構わんので、文句も言わずにインスタントコーヒーを啜った。絹坂はコーヒーに呆れるほど砂糖とミルクをぶちこんで、コーヒー牛乳をホットにしたようなものにしていた。そんなに甘くするのならば、最初からコーヒー牛乳を飲めばいい。
　コーヒーで一服した俺と絹坂は、新居の片付けを行うことにした。段ボールの中身を出して、それらをあるべき場所に配置する作業を行った。とはいえ、家具と同じように、絹坂の荷物はさほど多くはなく、夕方までに片づけは終わってしまった。
　その後、二人で連れ立って近所のスーパーへ買い物に行き、食材

と絹坂の部屋の生活雑貨を買い込んだ。買った食材は牛肉、糸こんにゃく、長ネギ、春菊、椎茸、焼き豆腐など。
「ずばり、今夜の夕飯はすき焼きですー。日本人、すき焼き好きネー」
絹坂は長ネギを振り回しながら、似非外人風に言った。
「先輩も嫌いではないですよねー？」
俺は基本的にあまり肉は好かないが、すき焼きはそれほど嫌いというわけではない。
というわけで、俺は大人しく絹坂の作ったすき焼きを共に食した。すき焼き自体は大変遺憾ながら美味であったと言わざるを得ない。
「先輩ー。すき焼きの味は如何ですかー？」
絹坂はニコニコと笑いながら尋ねてくる。我ながら良い出来だと自慢するが如き笑顔だ。どういうわけだか、無性に腹が立ったので、何か粗はないかと鍋の中を見つめたが、残念ながら見つけることができなかった。
「先輩先輩ー。どーなんですかー？　美味しいですかー？」
絹坂は調子に乗って、問い続けてくる。
「悪くはないが、店のものには及ぶまい」
仕方がないので、悔し紛れみたいなことを言って誤魔化すと、絹坂は心底呆れた顔をした。
「先輩って本当に素直じゃないですねー」
「うるさい」
「ツンデレもツンばっかりじゃダメですよー。デレも出して下さいよー」
「やっかまいしいっ！　わけわかんないこと言うなっ！」

厄病女神、旅行会に潜り込む

通称倶楽部と呼ばれるうちの組織は、幹部である俺をしても一体全体、何を目的として存在しているのか全く不明というわけのわからん組織である。

この為、倶楽部に属する各部署や構成員は各々自分勝手に思うがままに行動しており、倶楽部として一致した方へ向かうことは少なく、意思統一が為され、団結が成ることは非常に稀である。

そのくせ、うちの倶楽部には規則や慣習・慣例といったものが多々存在する。倶楽部の構成員はそれらの決まり事を守らなければならない。

よくよく考えるとそれらのルールを破ったところで、大した問題はなさそうなものだが、しかし、我々の常識というか認識の中では、これらの決まりを守ることは絶対であり、規則や慣習から外れた例外的な行動を取ることは、組織への大きな挑戦と見做され、組織から制裁が下されることや組織から追放されることもありうるのだ。

それらの数多ある決まりの中に、倶楽部旅行というものがある。正式名称はないのだが、倶楽部主催の旅行なので単純に倶楽部旅行と呼ばれている。

これは、いつぞやの倶楽部指導者である頭取首座が、あんまりにもバラバラで団結力に欠ける倶楽部の現状を憂い、倶楽部の結束を高めようと、倶楽部合同の旅行を企画・実行したのが始まりである。それが意外と好評で、例年の行事と化したものである。当初は年一回であったのが、徐々に回数が増えていき、季節ごとに二回となったものである。旅行は幹事長傘下の道中奉行が企画・実行しており、毎回、倶楽部の構成員の過半が参加している。ただ、当初の目的である倶楽部内の結束力向上に役立っているかどうかは極めて疑問である。

この倶楽部旅行に参加すべく俺は朝六時という、極めて非常識な

集合時間に大学の正門前に突っ立っていた。
　周辺には数十人もの若者が屯していた。全員、うちの倶楽部の連中である。朝早くから大学に用がある人間や、たまたま通りがかった通行人が、一体、何の集まりなのかと奇異な視線を向けてくる。不愉快な気分がして、見物人を睨みつける。すると、あっという間に連中はそそくさと立ち去っていった。
「こーいうとき、この人は便利ですね。目だけで人を追い払える」
「ただ、目つきが悪いだけじゃねえか」
　代わりに、もっと近い周辺で不愉快な声が聞こえてきた。まぁ、いい。事実だからな。それよか別のことに俺は強い不満を抱いていた。
「この非常識な集合時間は一体何なのだ。道中奉行は馬鹿じゃないのか？　今の道中奉行は誰だ？」
「中林君だったと思いますけど」
　俺の言葉に薄村が答えた。
　高校時代、同じ組織に属していた彼女とは、大学でも同じ組織の一員であって大目付という役職にある俺の片腕となっている。大目付傘下ではあるが、今現在は勘定吟味役として勘定方に出向している。
「中林か。あいつは面白い奴ではあるが、常人には理解しがたい行動を取るからな。適切な人事か少々疑問だな」
「面白い旅行になっていいじゃねえか」
　だいぶ前からの腐れ縁であり、同じく俺の配下の公用組番頭なる役職に収まっている草田がのんきなことを言い出す。
「その面白の為に、こんな朝っぱらから集められるのは我慢ならん。言っとくが、俺は朝が苦手、というか、朝が嫌いと言っても過言ではない」
「んなもん昔から知ってるっつの」
　そう言って草田は大きく欠伸をした。
「しかし、朝が嫌いな双葉じゃなくても、この時間は辛いな」

「その名を口にするなっ！」
俺が草田の頭を叩いていると、四台のマイクロバスと三台の普通乗用車、二台の軽乗用車からなる車列が近づいてきて停まった。マイクロバスは全て「わ」ナンバーである。
「みなさーん、これから出発しまーす」
先頭の乗用車から降りた男が大声で呼びかけた。道中奉行の中林だ。
「えー。みなさん、それぞれ、事前に配布しました旅のしおりの配車表に従って乗車してくださーい。マイクロバスが先頭から一号車、二号車、三号車、四号車でーす。その後ろの普通乗用が、前から五号車、六号車、七号車になってます。軽は幹事の車でーす」
旅先まではなんと車移動らしい。マイクロバスはレンタカーを借りてきたようだ。二九人以下だったか未満だったかまでは中型免許以上があれば運転できるのだが、持っている奴がいて、運転しているようだ。
いや、それはさておき。
「この人数で車移動か。しかも、自分たちで運転してか。危ない上に、非効率だし、環境にも悪い。道中方は馬鹿揃いなのか？」
「うーん、でも、この人数でずらずら並んで電車とかバスに乗っていくのも大変だし、周りに迷惑になるんじゃねえか？」
「誰かはぐれたり、迷子になったり、誰か我儘な人が勝手にどっか違う所に行ったりしそうですしね」
「それは、アレか。高校の修学旅行で単独行動を取った俺に対する嫌味か？」
「まぁ、そのとおりですね」
俺の言葉に薄村はあっさりと頷きながら、手にした旅行鞄の中身を漁る。
「私たちの車って何号車でしたっけ？」
「お前の乗る車を聞かれても俺は知らん」
薄村の疑問にそう答えると、彼女は呆れ顔で俺を見上げた。

「何言ってるんですか。私とあなたと草田君の乗る車は同じだったじゃありませんか」
「む。そうなのか？」
「え？　そーなの？」
俺と隣に佇む草田が同じようなことを口にして、薄村は俺たちを睨んで溜息を吐いた。
「……あなたたち、旅のしおりちゃんと読みました？　要点だけでもチェックしました？」
彼女の言葉に俺は黙っていた。草田も声を発しない。
「この人たちは……。道中方を批判する前に、旅行のしおりくらい読んでは如何ですか？」
全くもって仰る通りである。屁理屈と詭弁に関しては誰にも負けないつもりである俺をもってしても反論のしようがない。しようがないので、
「ハハハハハ」
と、草田と二人して空笑いしてみる。
「もういいです。車に向かいましょう」
「で。結局、我々の車は何号車なのだ？」
「自分でしおりを出して調べようとは思わないのですか？」
さっきから、薄村の言葉が刺々しい。ここは大人しく自分で調べるとするか。
受け取って以来、一回ぺらぺら捲って眺めたきりで、全く読んでいなかった旅のしおりを取り出して捲る。
「えーと、配車が書いてあるのは何頁だ？」
「うーん。前の方だったと思うけどなー」
周りの連中が続々と各々の指定された車に乗り込んでいく中、俺と草田は二人して阿呆みたいに鞄を漁って引っ張り出した旅のしおりを睨みつける。しかし、探せど探せど配車が書いてある頁は見えてこない。
「あ、あった。七号車だってよ」

「おい、待て。その配車の頁はどこだ？」
「いや、それ、もういいから、七号車に行こうぜ」
「いや、ちょっと待て。配車の頁が見つからんぞ」
「もうそれいいから、早く乗ろうぜ」
「そうですね。もう、先頭車が出発していますし」
「配車の頁なんぞないぞっ！？　頁が抜けているのではないかっ！？」
「そーいう文句は車の中で言ってくれよ。車に乗ってねーの俺たちだけだぞ」
「いや、しかし、配車の頁が」
「いいから、こっち来てください」
俺が躍起になって配車の頁を探しているというのに、薄村と草田は俺の両腕を組んで最後に残った車へ向かって歩き出す。不承不承ながら、俺も、しおりの件は暫し棚上げし、車へと向かうこととした。
「そういえば、お前、ほら、あの娘はこないの？」
「誰のことだ？」
草田の問いに俺は首を傾げる。
「すっ呆けるなって。ほら、お前の、彼女」
「はて、何のことだか」
「絹坂さんのことですよ。いつも一緒じゃあないですか」
俺がとぼけていると、薄村まで余計なことを言い出した。
「俺とあいつはそんないつも一緒にいるわけではない。ただ、あやつがよく俺の周りをうろちょろしているだけだ」
「あー、はいはい」
「その言い訳も聞き飽きました」
草田と薄村は腹の立つ笑みを浮かべた。非常に腹立たしい限りだ。
これも、全てあの厄病女神のせいだ。あやつはどうも俺の調子を狂わせる。
「それで、やっぱり、あの娘は来ないのか？」

「来るわけがなかろう。これは倶楽部の行事だぞ。あいつは倶楽部には何の関係もない」
「あなたが入っていると知ったら、すぐに加入するでしょうけどね」
遺憾ながらその可能性は非常に高い。そうなると、家でも学部でも倶楽部でもすぐ近くでうろちょろされる羽目になる。大変憂鬱なことである。
しかも、奴には、既に、この倶楽部の存在と、俺が所属していることを勘付かれている。この倶楽部はそこそこの規模を誇るが、あくまで秘密組織であるがゆえに、ごくごく真面目に正しくキャンパスライフを送る者は大学卒業するまで、ついぞ、その組織の存在に気付かぬほどの隠密性を誇るというのに。
とはいえ、絹坂もまだ大学に入り立ててであり、まだ右も左も分からぬ五里霧中の心境であろうからして、この怪しげな秘密結社を気取る組織の存在は知っていても、その行動の仔細を把握するまでは至っておるまい。
「あやつがこの旅行に参加するのならば、俺が欠席してやるわ」
俺はぶちぶちと文句を言いつつ、歩いていると、我々が乗車すべきと割り当てられている七号車の傍らに着いた。艶々とした赤いミニバンである。それも、最新のタイプと見える。普通に買えば、一五〇万円ほどするのではなかろうか。リッチな学生もいたもんだ。そのくせ、全面ガラスには初心者の証、若葉マークなんぞを付けている。
「なんなんだ。この真新しい車はどこの貴族様が運転してやがるんだ」
「これから、一緒に旅行に行こうってのに、そんな毒づかないで下さいよ。親とか知り合いの車を借りているのかもしれないじゃあありませんか」
イライラして言った俺の言葉に、薄村が言った。なるほど、確かに、その可能性も考えられる。しかし、これほどピカピカの新車を免許取り立てに運転させるとは、なんとも大胆なことをさせる。

「新車に見えるくらい綺麗に使ってるのかもしれねーじゃん」
「それならば、尚の事、車を大事していよう。どちらにせよ、初心者マークに運転させるとは、剛毅なことだ」
「まぁ、こんなご立派な新車で送迎して頂けるんですからありがたいと思って乗っていましょうよ」
「しかし、初心者の運転に命を任せるのはなぁ」
「文句ばっかり言ってないでさっさと乗って下さい」
薄村に睨みつけられ、俺は渋々と黙って助手席に乗り込んだ。助手席に乗ったのは、なんとなくである。まったくの偶然である。たまたま、薄村と草田の先を歩いていた為、彼らの方が後部座席に近く、俺の方が助手席に近かった為である。ミニバンは五人用なので、後ろに三人並んで座れなくもないが、助手席が空いているのに、わざわざ、三人くっついて座る必要もあるまい。
助手席に乗り込んで、運転手の面を見て、俺は助手席に乗り込んだことを大いに後悔した。
「いらっしゃいませー。どちらまでー？」
「とりあえず、お前のいないところまで行きたいな」
運転席では、厄病女神がニンマリと笑っていた。

厄病女神のドライビングテクニック

「貴様、いつの間に免許を取ったのだ？」
「受験終わってからですー。ＡＴ限定ですけどねー」
ぷらぷらと揺れる初心者マークを睨みながら尋ねると絹坂がにこにこと微笑みながら答えた。
「取ってから、えーっと、一ヶ月か二ヶ月くらい経ってますねー」
ということは自動車学校時代を含めたとしても、ドライバー歴はよくて三ヶ月かそこらしかないのだろう。
「気を付けて運転しろよ」
「大丈夫ですよー。そんな心配しなくてもいいですよー」
信号で止まったところで、そう言ってから、絹坂は「あ」と不穏な声を漏らした。
「何だ」
「ドアミラー畳んだままでしたー」
「よし、俺は車を降りるぞ」
「嫌だなー。ちょっと、うっかりちゃんだっただけですよー」
絹坂はへらへら笑いながらスイッチを押して、ドアミラーを動かした。
自分でうっかりちゃんとか言うなよ。ていうか、お前、ドアミラー畳んだままよくここまで運転してきやがったな。何を見て後方確認をしていたんだ。
「お前、普段、どれくらい運転してんだ？」
絹坂の運転技術に甚だ不安を覚えて尋ねると、絹坂は、何故か一回ワイパーを動かしてから、答えた。
「この車を買って以来毎日運転してますよー」
「この車を買ったのはいつだ」
「引き取ったのは昨日ですねー」
「それは、昨日と今日運転してるってだけだろうがっ！」

「まぁまぁ、そうやってすぐ怒らないで下さいよー」
絹坂はへらへら笑いながら言った。
「いいから、前を向いて運転しろ。このボケナスめ。この車を買う前はどれくらい運転したんだ？」
「うーん」
更に質問を重ねると、絹坂は危なっかしくふらふらと微かに蛇行するような運転をしながら答えた。
「そーいえば、自動車学校卒業してからは一度もしてなかったですねー」
「よし。車を止めろ」
「嫌ですー」
「いいから！　止めろっ！　俺は降りるぞっ！」
「降りれるもんなら降りてくださーい」
絹坂は極めて嬉しそうにニヤニヤ笑いながらアクセルを踏み込む。
くそ。やはり、こいつの顔を見た時点で、車から降りるべきだったんだ。
今からでも、多少無理をしてでも降りてやろうかとも思ったが、走行中の車から降りるなんてのはスタントマンかジャッキー・チェンにしかできんことだ。生憎と俺はどちらでもないし、己の体の虚弱さは俺自身が一番よく知っている故、止めることとした。
致し方がないので、大人しく黙って乗っていることとした。
「おい、何だ。この中途半端なスピードは、スピードの出し過ぎはいかんが、程々のスピードを出して周りに合わせないとかえって危険だぞ。それから、ちと左に寄り過ぎではないか？　あ、コラ、左折するときは左後ろに注意しろっ！　バイクとか自転車を巻き込む可能性があるし、横断する歩行者がいるやもしれんではないかっ！
初歩中の初歩だぞっ！　まったく、貴様は周囲への注意が足らん。ちゃんと左右と後ろを確認しているのか？　おいっ！　今の車線変更はいかんだろうがっ！　今、後ろ見たかっ！？　見た？　むぅ、いや、しかし、危ない感じだった。大体、貴様はだろう運転的なと

ころがある。自動車学校でもいっているとおり、かもしれない運転をだな」
「先輩。うるさい」
絹坂が俺を睨んで言った。なんと、絹坂が眉間に皺を寄せているし、普段はふんにゃりと垂れている目尻が微かに上がっているように見える。
「確かに、うるさいですね」
「いるよなー。人の運転に一々口挟む奴」
絹坂の言葉に、後ろの薄村と草田も同意する。
まぁ、確かに、少々口煩かったやもしれぬ。とはいえ、ついつい、口を出したくなる危なっかしい運転をする絹坂が悪いのだ。
「まぁまぁ、私だって、ちゃんと運転できるように昨日練習したから大丈夫ですよー」
一日練習したくらいでは付け焼刃もいいところだろう。全く安心できない。
「危うくスーパーの屋上駐車場から車ごと投身自殺しそうになりましたけどー。いやー、バックしていたら、アクセルとブレーキを踏み間違えましてー」
「貴様は耄碌したジジババドライバーかっ！？」
「あぁ、たまに、高齢者ドライバーがアクセルとブレーキを踏み間違えて事故るニュースを見ますね」
後ろの席で薄村が呟く。後部座席の薄村も草田もしっかりとシートベルトを着けていた。道路交通法云々よりも己の命がかかっているからな。賢明なことだ。
「貴様は素人マークではなく、枯葉マークをつけて運転しろっ！素人マークでは他の車への注意喚起が不十分だっ！」
「素人マークって、若葉マークのことですかー？　じゃあ、枯葉マークは高齢者用のマークのことですかー？　先輩、酷い呼び方をしますねー」
「煩い。運転素人の奴が付けているマークを素人マークと呼んで何

が悪い。初心者と素人に違いなどあるまい」
「いや、そっちは、まぁ、まだいいですけどー。枯葉マークは……」
「政治家が言ったら政治問題になって辞任ものですね」
俺の発言を絹坂と薄村が問題視する。草田は欠伸をしつつ、自分の鞄を漁っている。
「何を言うか。何をどう考えても、爺様婆様連中はもう枯れておるだろうが。どこをどう見ても、明らかに枯れているだろうが。もう先は短いだろ。もう木から落ちるのを待つばかりであろうが。そーいう連中のマークを枯葉マークと呼んで何が悪いか。事実に則った表現であろう。落ち葉マークと呼んでも悪くないかもな」
「その論理だと、落ち葉ってもう死んじゃってるじゃないですか」
薄村が何か呟くが無視する。
「大体、枯葉という呼称の何が悪いのか。実際、もう枯れているんだからしょうがないじゃないか。生物は皆時間が経てば老いるし枯れていくのだ。老いるのは自然な現象であり、全く悪いことでもマイナスなことでもあるまい。誰もがいつかは老いるのだし、老いるのは自然な現象であり、これを無理にオブラートに包んで分かり難くすることに何の意味があるのか。そもそも、枯れていること、老いていることの何が悪いのか。若葉には若葉の美しさがあるように、枯葉には枯葉の美しさとかワビザビがあるもので、その様子は若々しく瑞々しい新芽とは違った良さがある。紅葉の季節に人々は大挙して枯葉を観に行くのは枯葉が美しいからであろう。そもそも、世間では、枯れていること、老いていることを過敏に悪し様に捉える傾向が強すぎる。最近じゃあ、爺様婆様を、老人と呼ぶのさえダメだと言い出す連中がいるくらいだ。高齢者だの高年者だのシニアだのと言い方呼び方単語を変えたところで一体何の意味があるというのか。呼び方を分かり難くしようとも、どう考えても、老人と若人の年齢の差というものはあるもので、それらを無視して無理に平等的に取り扱うのは無理がある。老人に若人と同じ生き方を求めるのは無理というものだ。老人には老人に合った生き方あろうし、その

生き方を当人が楽しみ、生き生きと過ごせるならば全く問題はないはずだ。若人には若人の生き方と楽しみがあり、老人には老人の生き方と楽しみがある。しかして、世では老人という呼び方は宜しくないだの、枯葉マークという呼称は失礼だの何だのと、んな下らんことを言っている暇があったら、如何にして老人が老い先短き残りの人生を楽しめるかを考えるべきである。具体的にいうなれば、老人の生活しやすい環境整備と老人の社会参加が云々」

「何で、休みの日にまで、講義みてーな話を聞かねーといけねーんだろ」

後ろで誰かが何か言った気がしたが、気にせず、俺は続けるのであった。

「つまりは、老人を社会の負荷として考えるだけでなく、彼らの社会参加によって、老人が生き甲斐を持ち、自らが社会に必要とされいると感じることが云々」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8304i/

厄病女神寄生２

2010年11月26日00時10分発行